13. 弥生時代から卑弥呼の邪馬台国・大和初期王権へ　国家形成の時代を動かした「鉄」
2010 年秋　関西各地で開催された博物館特別展とそのシンポジュウム ＆ 連続講演会　聴講まとめ

無手勝流で　鉄をキーワードに　弥生から邪馬台国・大和王権への変遷を整理　By Mutsu Nakanishi

纒向遺跡で卑弥呼??の宮殿が出土したり　この時代につながってゆく弥生の大鍛冶工房高地性集落が淡路・芦屋会下山で見つかるなど従来の視点を変える新しい発見が相次ぎ、かつ来館数増加が各博物館の緊急課題となって　本年秋　関西ではちょっとした古代史展がブーム。　博物館が連携して卑弥呼邪馬台国・初期大和王権成立に果たした「鉄」の役割を問う特別展・シンポ・連続講演会が 20 以上各地の博物館で開催され、古代史ファンが数多く詰めかけ、弥生の末期から古墳時代にかけての国家成立期　朝鮮半島から古代大和へと続く「鉄の道」の役割が広くクローズアップされた。

誰もが知っているようで、中々自信持って話せない　古代日本の国家形成のアプローチ。
古代のロマンを秘めたこの邪馬台国や大和王権成立の歴史研究には数多くの研究者・歴史愛好家が加わり、そのアプローチは千差万別　それぞれが　自分の尺度で好き勝手に語るので　聞く方の頭の整理が追いつかない。

　　魏志倭人伝に記紀　中国鏡に三角縁神獣鏡　遺跡遺構・出土物　鉄器に青銅器　墳墓形式
　　時代の表し方も　土器編年　鏡編年　時代区分　世紀表示

鏡を丹念に説明してもらっても　銅鐸???　銅矛???　土器も ○○式の土器　布留だ　庄内式と言われても…と
それらに「吉野ヶ里　纒向　箸墓古墳　奴国だ　卑弥呼・邪馬台国だ　倭だ」と話が膨らみ　それにばらばらな　年代表記が加わるともう頭の中で　ぐしゃぐしゃ。　話がどうつながっているのか　もう　お手上げでした。
今回　それぞれの特別展が連携して　しかも　同時期に「鉄」をキーワードに数多くの事柄を整理して聞くことができ、多数のの資料も得て、年代表記も　鏡に土器　そして　中国魏書の記述　それぞれの相互関係も少しは理解でき、今まで　ちんぷんかんぷんだった話が多少とも理解でき、頭の中がまとまってきたようなった気がしています。

今回　関西の特別展・シンポジュームなどに出かけ、「卑弥呼の時代の鉄の役割」ついて　聞いたことを無手勝流にまとめるとともに　今回得た資料から年代表記の相互比較や　魏書に書かれたことと史実の関係など　役に立ちそうな資料・図表整理して集めてみました。　今回も思ったのですが、歴史の話は　何年前・西暦何年頃と共通年代尺度の付記はしてほしいもの。

2010 年秋　関西での博物館連携で開催された主要な「鉄から見た弥 生から大和への時代変遷」関連の特別展リスト

- 2010 年 10 月 2 日～12 月 5 日
  近つ飛鳥博物館「鉄とヤマト王権」　邪馬台国から百舌鳥・古市古墳群の時代へ
- 2010 年 10 月 30 日～12 月 5 日
  兵庫県立考古博物館ふるさと発掘展「弥生の鍛冶工房　五斗長垣内遺跡への道」（淡路島震災記念館）
- 2010 年 10 月 2 日～11 月 28 日
  兵庫県立考古博物館「茶すり山古墳」巨大円墳に眠る播磨の王
- 2010 年　9 月 22 日～11 月 23 日
  天理大学付属天理参考館「よみがえるヤマトの王墓」東大寺山古墳と謎の鉄刀
- 2010 年　10 月 9 日～12 月 12 日
  大阪府立弥生博物館　九州と近畿「邪馬台国」

弥生時代から卑弥呼の邪馬台国・大和初期王権へ　国家形成の時代を動かした「鉄」

無手勝流で　鉄をキーワードに　弥生から邪馬台国・大和王権への変遷を整理

2010 年秋　関西各地で開催された博物館特別展とそのシンポジュウム & 連続講演会　聴講まとめ

By Mutsu Nakanishi

『魏志』倭人伝によると、３世紀前半の日本列島には、卑弥呼の治める邪馬台国を盟主とする 29 ヶ国からなる倭国連合が形成されていたことが知られる。一方最近の考古学的な研究成果からは、３世紀の中葉ないし中葉すぎには、近畿中央部の「やまと」の勢力を中心に、各地の首長たちの政治連合にほかならない初期ヤマト政権が成立していたと考えられている。私は、こうした初期の倭国連合の形成には、鉄資源の確保という問題が関わっていたと考えている。ここでは「鉄」をキーワードに、倭国連合の形成の契機、さらには邪馬台国連合から初期ヤマト政権への展開過程をあとづけてみることにしたい。

近つ飛鳥博物館　h22年度秋季特別講演会
「倭国連合の形成と鉄」 近つ飛鳥博物館館長　白石太一郎氏 講演資料　巻頭より

弥生の定住農耕文化の始まりとともに、紀元前２世紀頃に鉄が伝来し、その後　時代とともに、大陸・朝鮮半島から　鉄製品や鉄素材を輸入しつつ、それらを鍛冶加工して数々の農耕具・武器など、石器を置き換えつつ鉄器の時代を作り上げた。
そして、同時に　この時期　定住農耕の社会の展開は集団化をますます発展させ、地域集団から地域首長国　そして国　へと社会を高度に発展させ、やがて　卑弥呼・邪馬台国から　大和王権による日本統一へと進んでいった。
弥生時代の水田稲作と鉄器は切り離せないものとして、弥生時代に日本全体が鉄器時代に入ったとみられがちであるが、鉄器の利用・普及には日本各地で大きな差があり、弥生時代の後期を迎えても　北部九州を除き、主要利器は石器であり、実用鉄器が大きく花開くのは古墳時代に入ってからだという。
　愛媛大学村上恭通氏によれば、各地に首長国が誕生していた弥生後期２世紀～３世紀初めになっても
　「西から東へ伝わってきた鉄の最前線は北陸・丹後・播磨・阿波を結ぶ線ではないか
　　また、鉄に対する温度差が日本各地であったようだ」という。
畿内の中心　大和での鉄の蓄積は小さく、大陸／朝鮮半島に近い北部九州首長国が安定な鉄器入手経路を支配し、山陰・丹後・北陸の日本海沿岸もまた独自の鉄の入手路を確保していた様であるが、瀬戸内沿岸や畿内・東国の諸国は鉄の入手を北部九州に頼らざるを得ず、思うように利用できる鉄素材・鉄製品を手に入れられなかったと考えられる。

卑弥呼・邪馬台国が登場する弥生の終末期　３世紀半ば　国内の鉄の事情が一変する。
北部九州に偏在していた鉄器・鉄器加工技術の中心が畿内に移り、北部九州の鉄器製造は衰退するのである。
その卑弥呼が登場する前の時代には　地域集団そして各地の国々での争いが多発し、特に瀬戸内海に沿う地方では　鍛冶工房など生産工房を持つ高地性集落とその麓周辺にも数多くの集落ができる。　ところが　それらの集落は　卑弥呼が登場するすぐ前にほとんどが次の時代につながらず消滅する。　摂津・淡路・吉備そして九州でも同じという。
これらの変化はいったい何を意味するのか　卑弥呼登場と関係するのか・・・興味深いところである。

また、弥生時代　鉄器が中国・朝鮮半島から鉄器が入って来るが、実用鉄器を見ると　農耕具など多彩な実用鉄器が使われたのは豊富な鉄素材を入手できる北部九州などに限られ、それ以外ではほとんどが、まだ小型の工具などを除いてはほとんどが石器である。　畿内でも弥生時代後期にならないと実用鉄器はなかなか普及してこない。
この時代でも　畿内での鉄器出土数は限られているが、大幅に石器製造数が激減し、なおかつ　鉄器が組み込まれ田と考えられる柄が多数出土し、鉄器の需要がこの時代大きく高まっていったことがうかがえる。

弥生時代の鉄の流れを見ると
西から東へ　鉄器の量・質・大きさとともに鉄製品の加工技術の稚拙さや適用鉄器の拡がりなどが、西へ行くほど退化している傾向がみられ、弥生時代後期へと時代が下るにつれ、鉄器加工技術が退化の傾向が地域によって現れている。
この理由は　獣文に考証されていないが、鉄素材の供給を先進地大陸・朝鮮半島に最も近い北部九州に握られ、鉄素材や鉄器の量・質　そして　その加工技術も北部九州に握られていた表れと考えられよう。
この大陸・朝鮮半島の鉄を巡って、大陸・朝鮮半島の先進文化・技術とともに鉄素材・鉄器の量・質とも潤沢に入手したい瀬戸内・畿内の首長国は支配権の奪取がきわめて大きな課題であったに違いない。
何がきっかけかはわからないが、鉄の安定確保を巡って北部九州と西日本諸国の間で、争いが頻発したと想像される。
１世紀後半から３世紀初頭にかけて、特に必要に迫られていた瀬戸内・畿内の諸国は連合して、北部九州と争い　北部九州から鉄の支配権を奪い取っていった。　これが　中国魏志倭人伝に書かれた倭国の大乱であろうか??。

瀬戸内海岸沿いの首長国には　鉄鍛冶工房など生産工房とともに戦に備えた数多くの高地性集落の出現し、「鉄の安定供給」を目的とした瀬戸内・畿内首長国連合である女王卑弥呼の邪馬台国連合が北部九州から鉄の供給権を奪取する。
その後、大和を中心とした連合は鉄の支配権を武器に　自立していた出雲・丹後・東海そして東国諸国を連合の中に組み入れ、前方後円墳を連合の象徴として初期大和王権が成立してゆく。
この時代変遷をもたらしたのは「朝鮮半島の鉄」の入手がキーワード
これが、どうも弥生時代から　伊都国など北部九州勢力の時代を経て　卑弥呼の邪馬台国・大和初期王権の統一国家形成への時代変遷の基本的な流れのようだ。

私をふくめて素人では　なんだか誰でも知っているようで、個々にはみんなばらばらで、なかなか　自信持って話せない　古代日本の国家形成のアプローチ。　これで　人の話も以前より理解できそうである。
また、弥生時代　鉄器が中国・朝鮮半島から鉄器が入って来るが、実用鉄器を見ると　農耕具など多彩な実用鉄器が使われたのは豊富な鉄素材を入手できる北部九州などに限られ、それ以外ではほとんどが、まだ小型の工具などを除いてはほとんどが石器である。　畿内でも弥生時代後期にならないと実用鉄器はなかなか普及してこない。でも畿内での鉄器出土数は限られているが、大幅に石器製造数が激減し、なおかつ　鉄器が組み込まれたと考えられる柄が多数出土し、鉄器の需要がこの時代大きく高まっていったことがうかがえる。

【補足】
大陸・朝鮮半島と自立して交流し、鉄のルートを有し、それぞれ独自の文化を育んでいた出雲など
の日本海諸国が、最初から邪馬台国連合に加わっていたのか、後で加わったのかはよく判らない。

- また、北部九州から大和への勢力移行については　記紀が記す北部九州から大和への東遷説も根強いが、人の交流移動についてまわる土器の流入移動から見ると、この弥生終末期・古墳前期　北部九州への畿内土器の流入が数多くみられるのに対し、北部九州の土器の畿内への流入が小さいといわれ、人の移動は他の地域より少ない。
明確な見解があるわけではないが、東遷の可能性は小さいとの見方が根強い根拠の一つと言われる。
- さらに　瀬戸内海を見晴らす瀬戸内沿岸の高地性集落をみると個々の集落からは全方位を見渡せないが、周辺の高地性集落をつなぐと瀬戸内海全体が監視できること　また　これらの集落に連携する地域の土器が出土することから、瀬戸内海沿岸の讃岐・阿波・吉備・播磨の諸国の連携が読み取れるという。
- なお、この時代　畿内への主要　鉄・文化の交流ルートは瀬戸内沿岸から播磨・摂津へのルートが主であり、讃岐から阿波→紀伊を通ってのルートは想定しにくいという。

以上　２０１０年秋　関西で開催された「鉄から見た弥生から大和への時代変遷」に関するいくつかのシンポ・講演会を聴講して得たメモ・感想より整理しましたが、整理のベースに　白石太一郎氏（近つ飛鳥博物館館長）の講演「倭国連合の形成と鉄」を置きましたので、随所に白石説に引っ張られていると思われますので、この点　ご留意ください。

by Mutsu Nakanishi

弥生時代から卑弥呼の邪馬台国・大和初期王権 日本統一国家形成へ 時代を動かした鉄
2010 年秋　関西各地で開催された博物館特別展とそのシンポジュウム ＆ 連続講演会　聴講まとめ
資料図集

1. 魏志倭人伝等中国史書にみる日本　　弥生から古墳時代にかけての時代変遷
2. 中国鏡・三角縁神獣鏡の出土分布と編年　遺跡・遺物が示す日本の変化
3. 弥生時代の鉄器出土分布の変化
4. 卑弥呼邪馬台国から大和王権の確立へ
5. 鉄の歴史年表
6. 歴史年表と編年対応

参考　　2010 年秋　関西での博物館連携で開催された

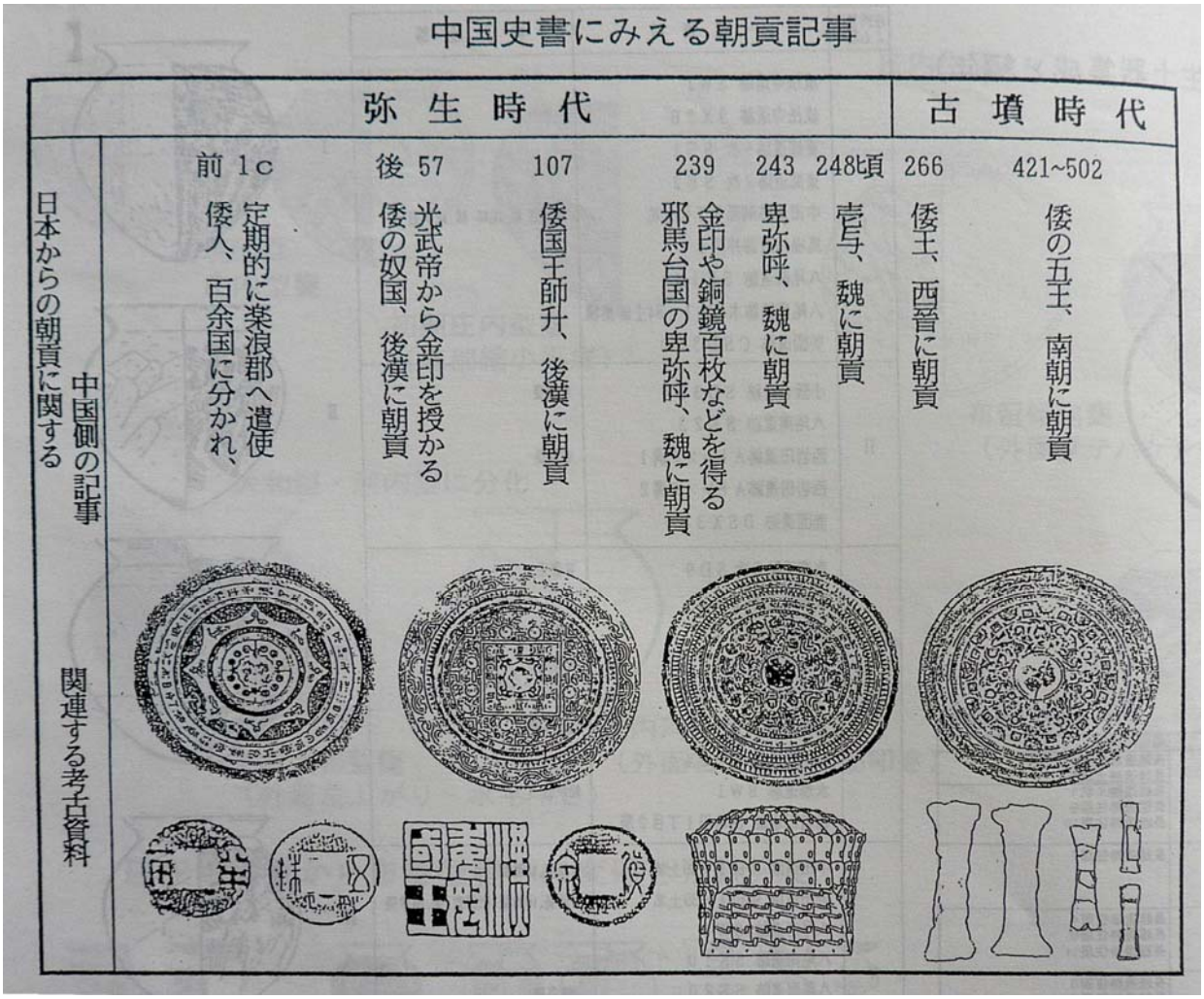
「鉄から見た弥生から大和への時代変遷」関連の特別展リスト

- 2010 年 10 月 2 日～12 月 5 日
  近つ飛鳥博物館「鉄とヤマト王権」　邪馬台国から百舌鳥・古市古墳群の時代へ
- 2010 年 10 月 30 日～12 月 5 日
  兵庫県立考古博物館ふるさと発掘展「弥生の鍛冶工房　五斗長垣内遺跡への道」（淡路島震災記念館）
- 2010 年 10 月 2 日～11 月 28 日
  兵庫県立考古博物館「茶すり山古墳」巨大円墳に眠る播磨の王
- 2010 年　9 月 22 日～11 月 23 日
  天理大学付属天理参考館「よみがえるヤマトの王墓」東大寺山古墳と謎の鉄刀
- 2010 年　10 月 9 日～12 月 12 日
  大阪府立弥生博物館　九州と近畿「邪馬台国」

参考資料

1. 近つ飛鳥博物館「鉄とヤマト王権」特別展　図説
2. H22 年 ふるさと発掘展「弥生の鍛冶工房　五斗長垣内遺跡への道」　兵庫県立考古博物館・淡路市教育委員会
3. 近つ飛鳥博物館 H22 秋季特別講演会資料　近つ飛鳥博物館白石太一郎氏講演資料「倭国連合形成と鉄」
4. H22 年 ふるさと発掘展「弥生の鍛冶工房　五斗長垣内遺跡への道」連続講演会資料
   芦屋市教育委員会　森岡秀人氏講演資料「鉄と青銅　近畿弥生社会における金属器生産」
5. H22 年 ふるさと発掘展「弥生の鍛冶工房　五斗長垣内遺跡への道」シンポジュウム資料
   「五斗長垣内遺跡の謎にせまる」
6. H20 年兵庫県立考古博物館　ふるさと発掘展シンポジュウム　資料
   「倭国連合の成立と姫路地域の役割」
7. 村上恭通氏「古代国家の成立過程と鉄器生産」（青木書店）
8. 野島 永 氏「鉄から見た弥生・古墳時代の日本海交流」
9. 弥生博物館　H17 特別展「北陸の玉と鉄」弥生王権の光と影　図説
10. 香芝市教育委員会 2006 年ふたかみ邪馬台国シンポジューム 6　資料集
    「邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨・と大和」
11. 播磨学研究所　最新考古学事情「播磨から読み解く邪馬台国」（神戸新聞総合出版センター）

1.　中国史書　魏志倭人伝　にみる日本　弥生から古墳時代にかけての時代変遷



■　倭国　百余国の首長国とそれらの盟主 女王国(邪馬台国)への経路

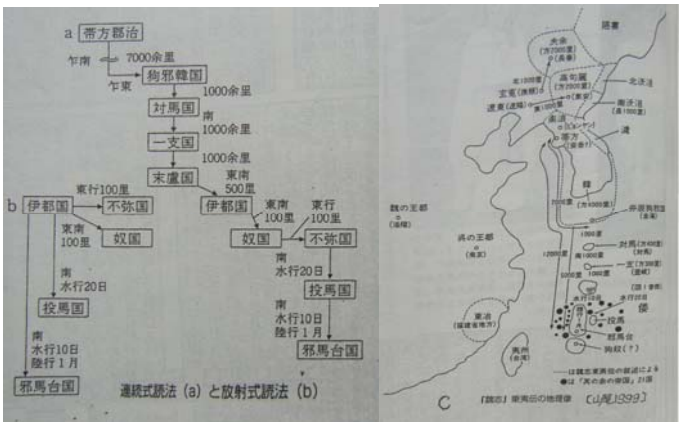
倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて國邑をなす。旧百余國。漢の時朝見する者あり、今、使訳を通ずる所三十國。郡より倭に至るには、海岸に循って水行し、韓國をへて、たちまち南したちまち東し、その北岸狗邪韓國に至る七千余里。

始めて一海を渡ること千余里、對馬國に至る。その大官を卑狗といい、副を卑奴母離という。居る所絶島にして、方四百余里ばかり。土地は山険しく深林多く、道路は禽鹿のこみちの如し。千余戸有り、良田無く、海物を食いて自活し、船に乗りて南北に市糴す。

又南に一海を渡ること千余里、名づけて瀚海という。一大國に至る。官をまた卑狗といい、副を卑奴母離という。方三百里ばかり。竹木叢林多く、三千ばかりの家有り。やや田地有り、田を耕せどなお食足らず、また南北に市糴す。

又一海を渡ること千余里、末盧國に至る。四千余戸有り。山海にそいて居る。草木茂盛して、行くに前人を見ず。好んで魚鰒を捕うるに、水、深浅と無く、皆沈没してこれを取る。東南のかた陸行五百里にして、伊都國に至る。

官を爾支といい、副を泄謨觚・柄渠觚という。千余戸有り。世王有るも皆女王國に統属す。郡の使が往来し、常に駐る所なり。



魏書の筆者の地理感と方向の読み替え　邪馬台国論争

■　倭国の盟主女王国(邪馬台国)が北部九州の伊都国に「官」を置き、大陸･朝鮮半島との物流を支配

女王國より以北には、特に一大率を置き、諸國を検察せしむ。諸國これを畏憚す。
常に伊都國に治す。國中において刺史の如きあり。
王、使を遣わして京都、帯方郡、諸韓國に詣り、および郡の倭國に使するや、皆津に臨みて捜露し、文書、賜遺の物を伝送して女王に詣らしめ、差錯するを得ず。

邪馬台国の北方の諸国には一大率という官が置かれ、諸国を監視していた。一大率は常に伊都国で治めていた、魏の刺史のような役目を果たしていた。
伊都国は中心地で、王が魏の都、帯方郡、韓の国々に使者を派遣する際や、郡の使者が倭国に来たさいは、皆が港に臨んで文書や贈物の点検をして女王に送っていたので間違いは起きない。
邪馬台国　卑弥呼の時代　邪馬台国は伊都国に一大卒という官を置き　大陸･朝鮮半島と国内諸首長国との間の文物の出入りを厳しく監視していた。
北部九州の首長国が握っていた大陸･朝鮮半島との交易･物流の支配権が女王国邪馬台国(連合)に移っていることを記録している。　この物流の中心は「朝鮮半島の鉄」であろう。

■　倭国の大乱と卑弥呼の女王国連合(邪馬台国連合)の誕生と卑弥呼のプロファイル

その國、本また男子を以て王となし、住まること七、八十年。倭國乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王となす。名付けて卑彌呼という。
鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫婿なく、男弟あり、助けて國を治む。王と爲りしより以来、見るある者少なく、婢千人を以て自ら侍せしむ。ただ男子一人あり、飲食を給し、辞を伝え居処に出入す。宮室、楼観、城柵、嚴かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す。

倭国には元々は男王が置かれていたが、**国家成立から 70～80 年を経た漢の霊帝の光和年間**の頃に政情不安が起き、歴年におよぶ戦乱の後、女子を共立し王とした。その女王が卑弥呼である。
女王は鬼道によって人心を掌握し、既に高齢で夫は持たず、弟が国の支配を補佐した。卑弥呼は 1,000 人の侍女に囲われ宮室や楼観で起居し、巡らされた城や柵、多数の兵士に守られていた。王位に就いて以来、人と会うことはなく、一人の男子が飲食の世話や取次ぎをしていた。
宮殿には楼閣(たかどの)や、城柵などが厳重につくってあり、警備兵が常に武器を持ち守衛している。
この魏志倭人伝に記載された戦乱を「倭国の大乱」という。この倭国の大乱が何をさすのか　よく判っていない。この大乱の後　北部九州の握っていた大陸･朝鮮半島との交易物流権が邪馬台国連合に移っていることは邪馬台国連合の性格を考えるうえで極めて重要で、「大陸の鉄」の交易物流権と考えられている。
また、卑弥呼の宮殿の様子が記述されており、本年　大和纏向遺跡で宮殿跡とみられる遺構が出土した。また、九州吉野ヶ里遺跡も大規模な城柵･楼観など宮殿の様相を示している

■　卑弥呼邪馬台国の朝貢　景初2年(238年)の記事

景初二年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わし郡に詣り、天子に詣りて朝獻せんことを求む。
太守劉夏、使を遣わし、将って送りて京都に詣らしむ。　その年十二月、詔書して倭の女王に報じていわく、「親魏倭王卑彌呼に制詔す。帯方の太守劉夏、使を遣わし汝の大夫難升米、次使都市牛利を送り、汝献ずる所の男生口四人、女生口六人、班布二匹二丈を奉り以て到る。女王は景初２年（238 年）以降、帯方郡を通じ数度にわたって魏に使者を送り、皇帝から親魏倭王に任じられた。

■　正始8年(248 年)、　邪馬台国と狗奴国との紛争

正始8年、太守王キ官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴國の男王卑弥弓呼と素より和せず。
倭の載斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。塞曹エン史張政等を遣わし、因って詔書･黄幢をもたらし、難升米に拝仮せしめ、檄をつくりてこれを告喩す。
正始８年(248 年)には、邪馬台国と狗奴国との紛争に際し、帯方郡から塞曹掾史張政が派遣されている。　この狗奴国の場所は明確になっていないが、濃尾平野･東海地方と考えられている。

近つ飛鳥博物館館長白石太一郎氏は日本の古代国家成立について
「　この狗奴国をはじめ東国の国々が、邪馬台国連合に加わり、
　　加わった時期は不明なるも出雲･丹後も加わって
　　前方後円墳を象徴とする大和初期王権が成立し、
　　統一国家が形成　古墳時代の幕開けとなったとのではないか　」
との仮説を提唱

2.　中国鏡・三角縁神獣鏡の出土分布と編年　遺跡・遺物が示す日本の変化

漢鏡４期　紀元前１世紀後半から　ずっと鏡の出土は北部九州に独占されていたのが、
漢鏡７期第二段階　３世紀初めになると一機にその出土が大和に変化し、北部九州から消え去る。
（　瀬戸内海地域の３・４世紀の古墳からも、漢鏡６期７期の鏡が出土するが、
　　鏡が示す時期と出土古墳が大きく異なり、異論があるので　検討からはずして見ている。）
また、漢鏡に続く三角縁神獣鏡のうち、一番古い三角縁神獣鏡　正始元年(240)・景初３年(239)の銘のある第一・２５０年代と考えられる第二段階の鏡は出現期の前方後円墳からしか出土しない。

このことから　３世紀半ば　北部九州の勢力にとって代わって大和王権が成立するという大きな変革があったことが、中国鏡・三角縁神獣鏡の出土変化からうかがえ、魏志倭人伝　邪馬台国連合の伊都国での大陸との流通統制の記述と符合する

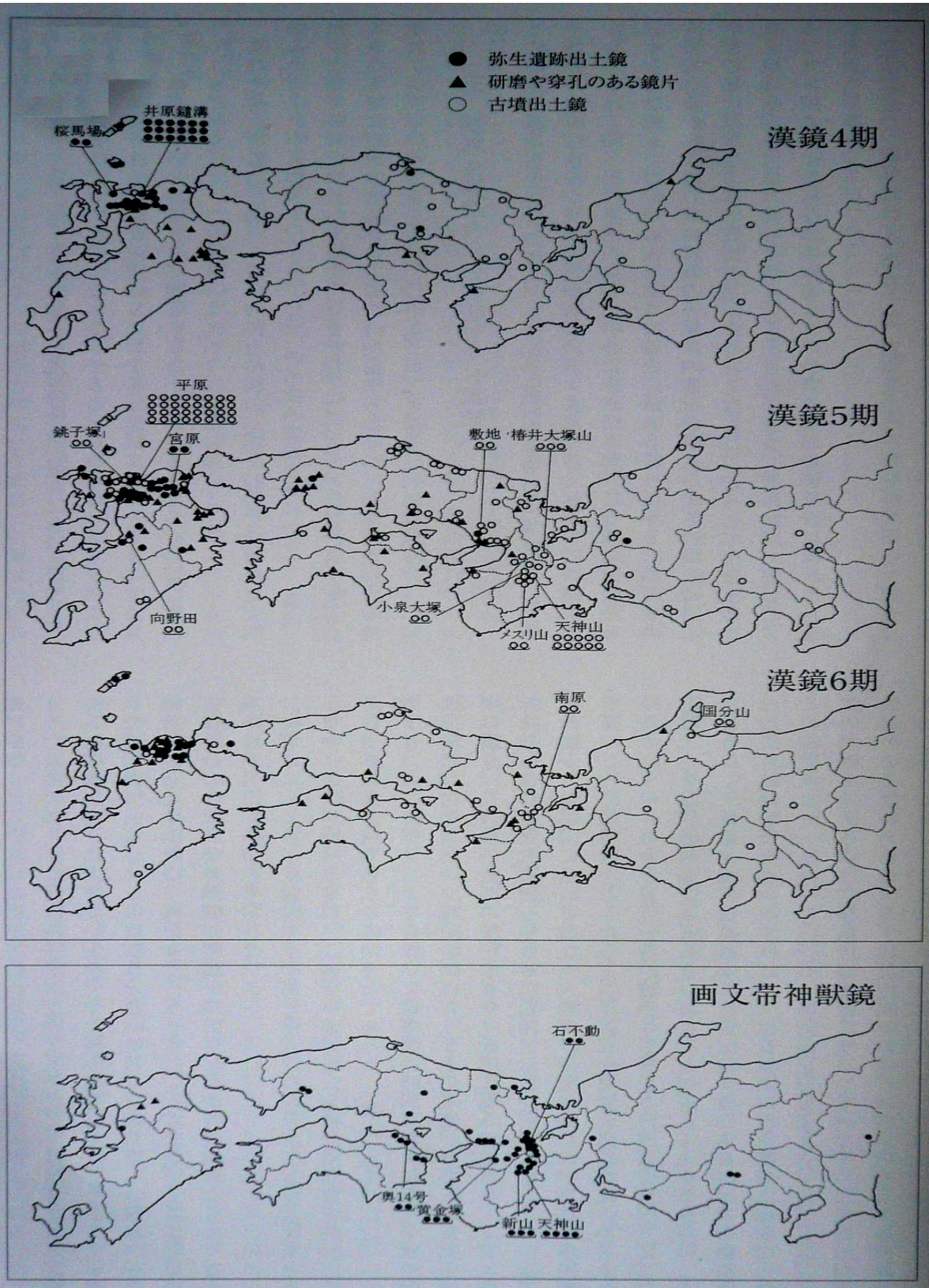
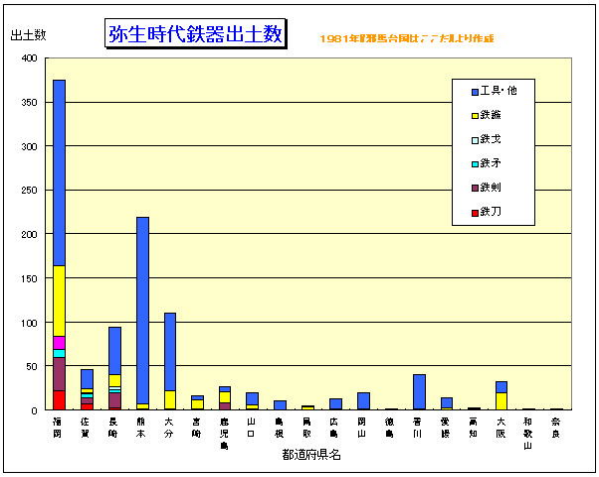
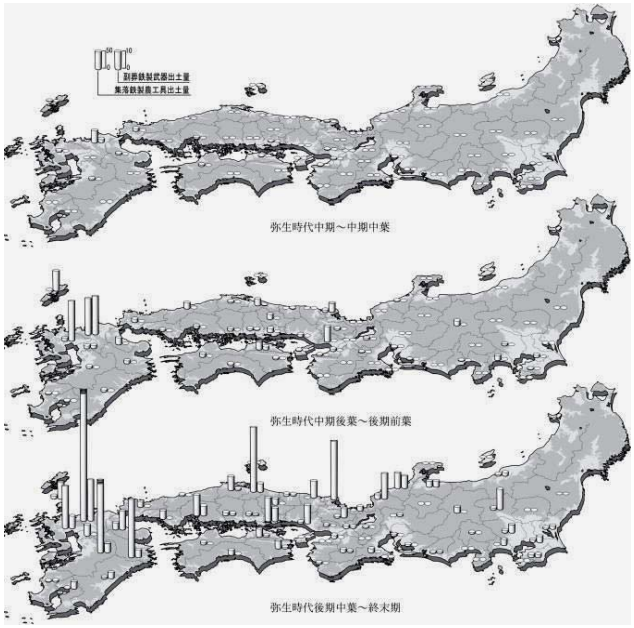


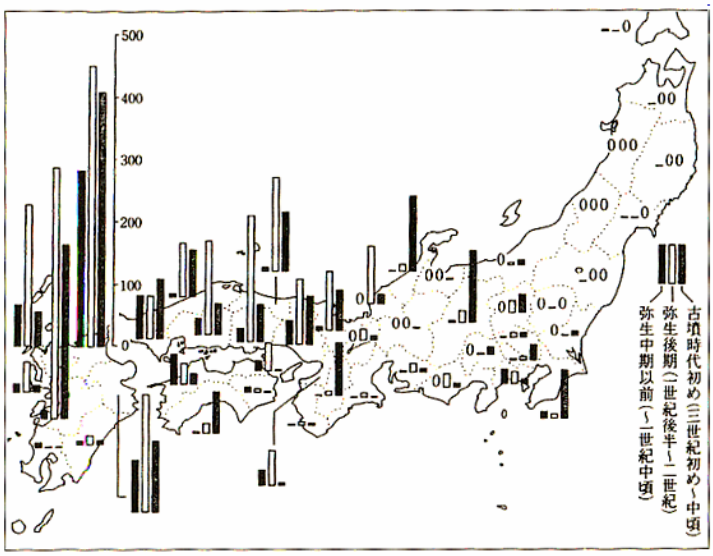
図4　日本列島における中国鏡の分布状況の変化（岡村秀典氏による）

3. 弥生時代の鉄器出土分布の変化



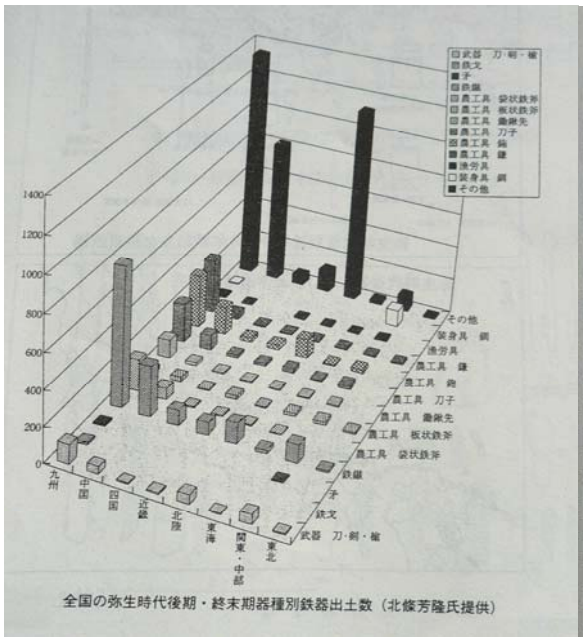
都道府県名	鉄刀	鉄剣	鉄矛	鉄戈	鉄鏃	工具・他	合計
福岡	22	38	9	15	80	211	375
佐賀	7	7	4	2	4	22	46
長崎	3	17	3	3	15	54	95
熊本	0	1	0	0	6	212	219
大分	0	2	0	0	20	88	110
宮崎	0	2	0	0	10	4	16
鹿児島	0	9	0	0	12	6	27
山口	1	0	0	0	5	13	19
島根	0	0	0	0	0	11	11
鳥取	0	0	0	0	4	1	5
広島	0	0	0	0	1	12	13
岡山	0	0	0	0	1	19	20
徳島	0	0	0	0	0	1	1
香川	0	1	0	0	0	40	41
愛媛	0	0	0	0	3	11	14
高知	0	0	0	0	2	1	3
大阪	0	0	0	0	19	14	33
和歌山	1	1	0	0	0	0	2
奈良	0	0	0	0	0	1	1
合計	34	78	16	20	182	721	1,051





地図１　県別にみた鉄器の出土数

鉄器は弥生時代を通じて圧倒的に北部九州に集中する。３世紀初めにヤマト王権が誕生してもいぜんこの傾向は変わらないが、東日本にも普及しはじめる。この直後、３世紀後葉以降の定型化した前方後円墳からの大量の鉄器副葬によって九州と近畿の鉄器量は逆転する（寺沢薫氏による説明。**地図１**は、川越哲志編『弥生時代鉄器総覧』〔2000年刊〕を一部時期補正して寺沢薫氏が作成）

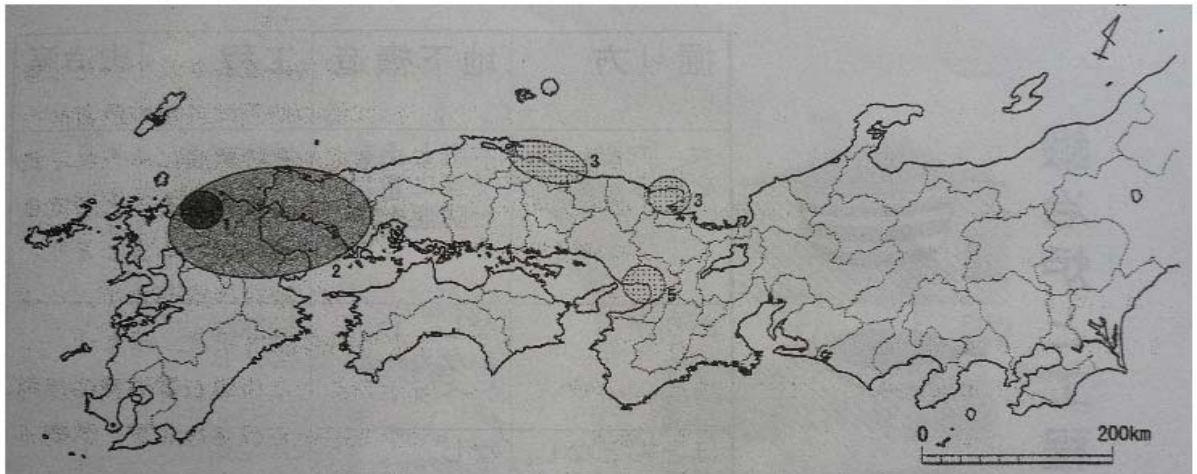


全国の弥生時代後期・終末期器種別鉄器出土数（北條芳隆氏提供）

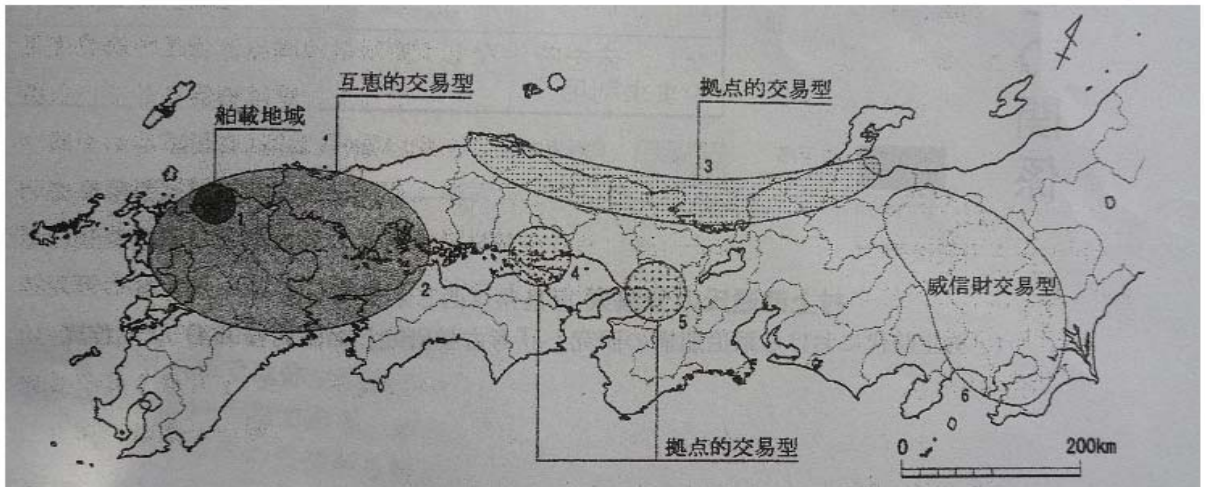
日本列島弥生時代の鉄器（註(3)文献より作成）〔川越哲志2000、松井2005 表〕

地域＼時代	前期					中期					後期					
鉄器の種類	工具	農具	武器	漁具	不明	工具	農具	武器	漁具	不明	工具	農具	武器	漁具	不明	計
北海道	2		2		10	1							1			16
東北				1	1			1	2			2	2		2	11
関東、甲信越						85	1	2		12	114	32	233	16	259	754
北陸						3		1			1084	15	109		154	1366
東海	1					3		1			30	7	25	2	1365	1434
近畿	1				5	60	3	41	1	328	247	12	331	3	219	1251
滋賀						6		8		12	3	5	5		4	43
奈良	1										4		6		32	43
和歌山						1			1	1	8	1	5		6	23
京都						6		6		275	66	4	153	1	37	548
大阪					1	14		13		10	30	2	33	1	82	186
兵庫					4	33	3	14		30	136		129	1	58	408
中国	4	1			5	82	6	28		47	616	80	424	5	629	1927
鳥取						7				3	179	24	89		234	536
島根						2				3	138	12	36	2	33	226
岡山						23	1	8		9	118	15	119		169	402
広島	2					20	1	5		13	109	18	87	2	132	389
山口	2	1			5	30	4	15		19	72	11	93	1	61	314
四国						33	1	23		105	69	20	109		64	424
九州	14	6	3		48	281	41	148	4	265	1116	538	1251	23	1661	5399
福岡	10	3	2		25	174	17	94	2	144	580	238	426	14	291	2020
佐賀	3	1	1			41	7	25		18	152	89	64		49	450
長崎						16	3	8	2	8	35	11	55	5	88	231
熊本	1					12	6	16		15	209	146	330		1105	1840
大分		2			20	35	8	2		72	112	54	266	3	85	659
宮崎						1		2		5	28		107	1	41	185
鹿児島					3	2		1		3			3		2	14
沖縄						1										1
計	227	7	5	1	69	549	52	215	7	757	3276	706	2485	49	4353	12583

弥生時代中期中葉以前の鉄器普及地域



弥生時代中期後葉から後期前葉の鉄器普及地域



弥生時代後期中葉から終末期の鉄器普及地域とその交易形態

第106図　弥生時代の鉄器普及地域のまとまりと交易形態

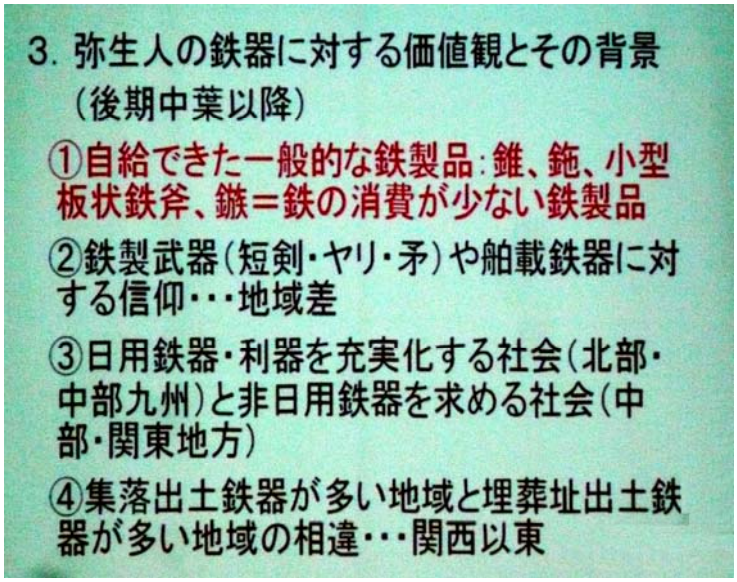
1. 九州北部中枢地域　2. 九州地方周辺地域　3. 山陰・北陸地域　4. 瀬戸内東部地域　5. 畿内地域　6. 関東・中部地域

弥生時代早期～弥生中期　中国から持ち込まれた鋳造鉄斧が鉄器の伝来のスタート

その後　朝鮮半島から鉄器や鉄素材を輸入する一方、弥生時代の中期には北部九州で鉄器の鍛冶加工がはじまり、

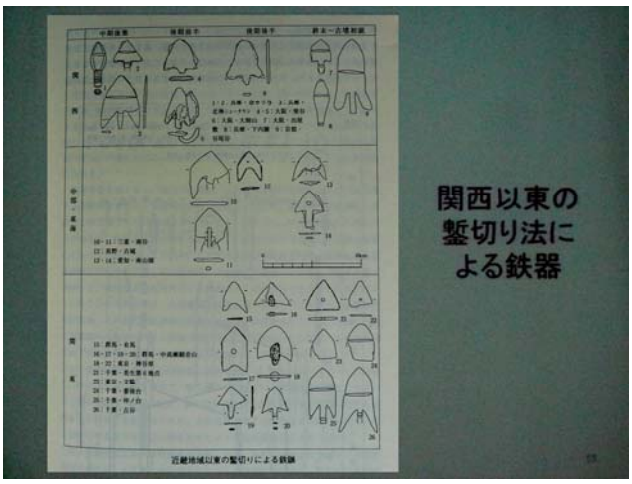
その後　弥生後期から終末期にかけて山陰・丹後・北陸など日本海沿岸諸国並びに瀬戸内で拠点的な鉄器生産が始まる

ただし、実用利器は非常に限られた小物生産で　また、鉄器加工生産の量・質・技術には　西から東に行くほど退化の傾向があり、素材の輸入を朝鮮半島に頼り、その流通を主に北部九州に頼っていたことが色濃く反映されている。

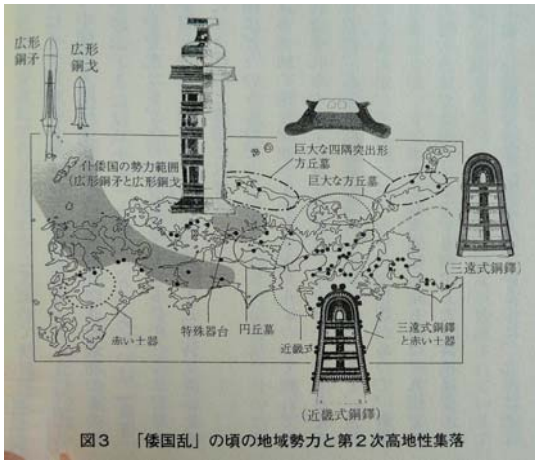


弥生時代は鉄器流入による農耕文化と思われがちであるが、鉄器素材を独自に作ることができず、広く大量に鉄を利器として使われるのはむしろ古墳時代以降である。
鉄器の使用は本当に限られ、日本各地の地方でその鉄の使われ方もまだ、ばらばらである。
鉄素材を自由に独自に作れず、加工技術も朝鮮半島に頼らねばならない時代　先進地からの距離が鉄の技術・価値感にも色濃く反映している。

村上恭通　2010.11.21.　五斗長垣内遺跡シンポジュウム　スライドより



高度な技術を有する鍛冶加工鉄製品が実用利器として用いられる九州に対し　関西以東では鏨切り法による鉄器生産
鉄器生産の実力が朝鮮半島より先進技術が入る北部九州とそれ以外のところで大きな差がある。



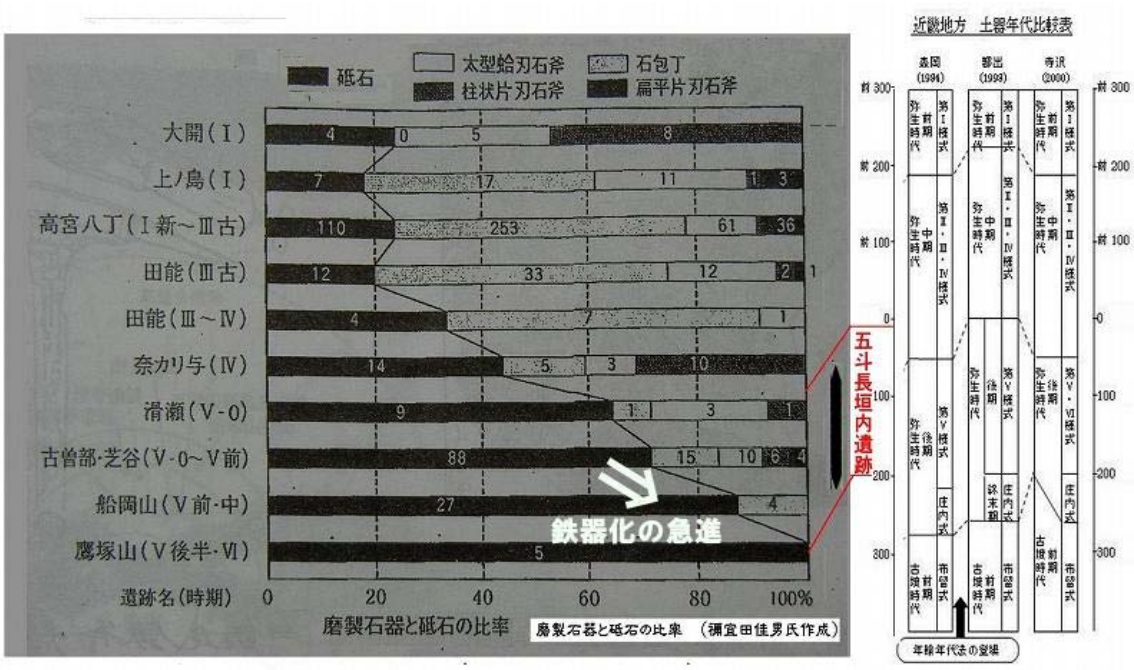
日本海沿岸の諸国では
北部九州経由でない独自ルートを朝鮮半島と持っていた??
それぞれ　独自の文化を花開かせ、鉄の蓄積も図っている。

【鋳造鉄器の伝来　弥生時代早期～弥生中期　中国から持ち込まれた鋳造鉄斧】

弥生時代の中期には北部九州で鉄器加工がはじまり、その後　弥生後期から終末期にかけて山陰・丹後・北陸など日本海沿岸諸国並びに瀬戸内で拠点的な鉄器生産が始まる。ただし、実用利器は非常に限られた小物生産で　また、鉄器加工生産の量・質・技術には　西から東に行くほど退化の傾向。

集落から出土する実用鉄器は　腐食によって　土中に消えてしまうことが多く、その出土数は小さい。しかし、鉄斧の柄の出土や急速な石器出土数の減少などから　石器社会から鉄器社会への激変がうかがえ、「幻の鉄器」と呼ばれる。

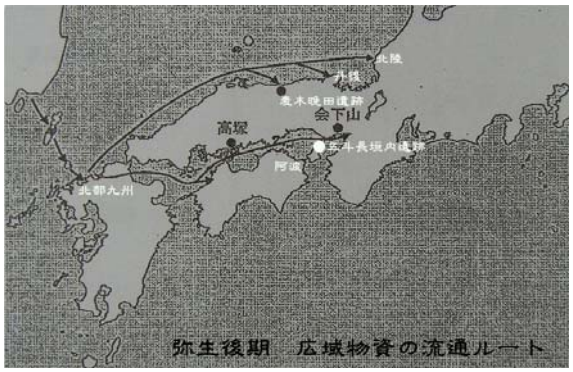
弥生後期　鉄器出土数の少ない近畿地方でも　その後半には急激な鉄器化が進んでいることが、「幻の鉄」の存在からうかがえる。

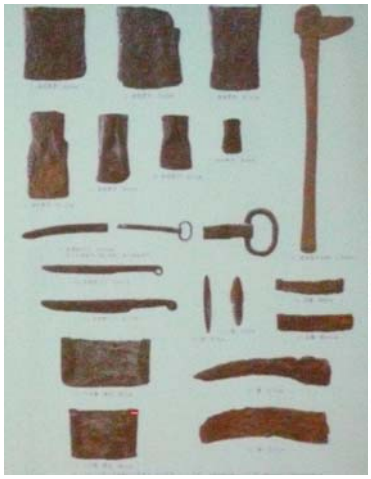


弥生時代後期(1世紀半ば～2世紀)には出土する石器のほとんどが砥石となり、石器製の農耕具の出土が激減する
近畿地方においても　この時代に実用鉄器の時代へ 入ったことがうかがえる。
（腐食等で鉄器の出土は少ないが、　鉄斧の柄が出土するなど実用鉄器の時代へ入ったことがうかがえる）

弥生の後期　近畿地方での鉄器需要急増の変化を示出土石器の急変

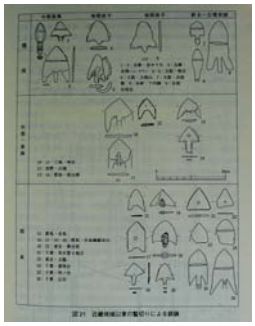
[禰宜田佳男氏作成資料を基に整理して本図作成]



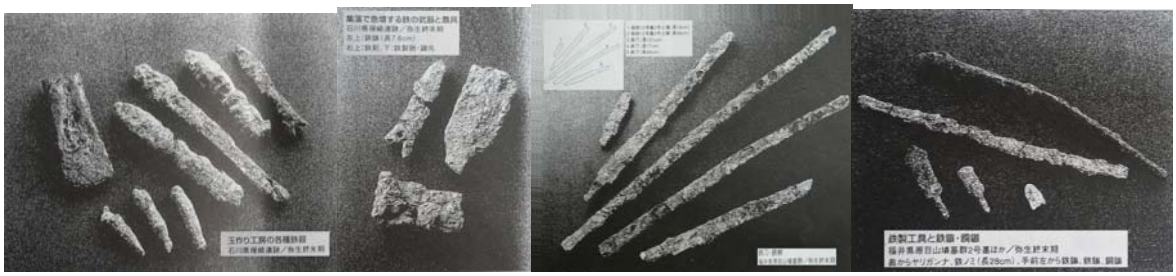


222 鉄斧などの鉄製品と加工前の鉄素材
上右・長5.6cm／弥栄町　奈具岡遺跡／弥生中期後半

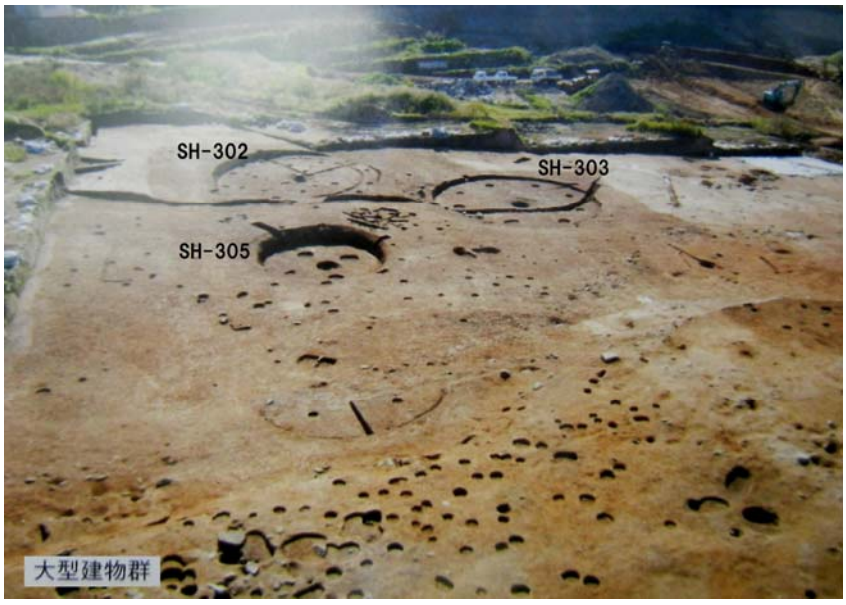
北部九州の代表的な鉄器　　山陰　妻木晩田遺跡・青谷上寺地遺跡の鉄器　丹後　奈香岡遺跡出土鉄器



阿波矢野遺跡出土鉄鏃　　兵庫　会下山遺跡出土品　　近畿以北出土金鏨加工鉄鏃



玉つくり工房が展開された北陸の鉄



近畿地方鉄器化の先駆け　淡路島　弥生後期

日本最大級の鍛冶工房集落　五斗長垣内遺跡（高地性集落）

周辺の数多くの集落・高地性集落と同様約１７０年づいた鍛冶集落は２世紀末消え去る

4.　卑弥呼邪馬台国から大和王権の確立へ

近つ飛鳥博物館白石太一郎館長の説

卑弥呼の時代　東海地方には前方後方墳を作る大和とは異なる文化があった。

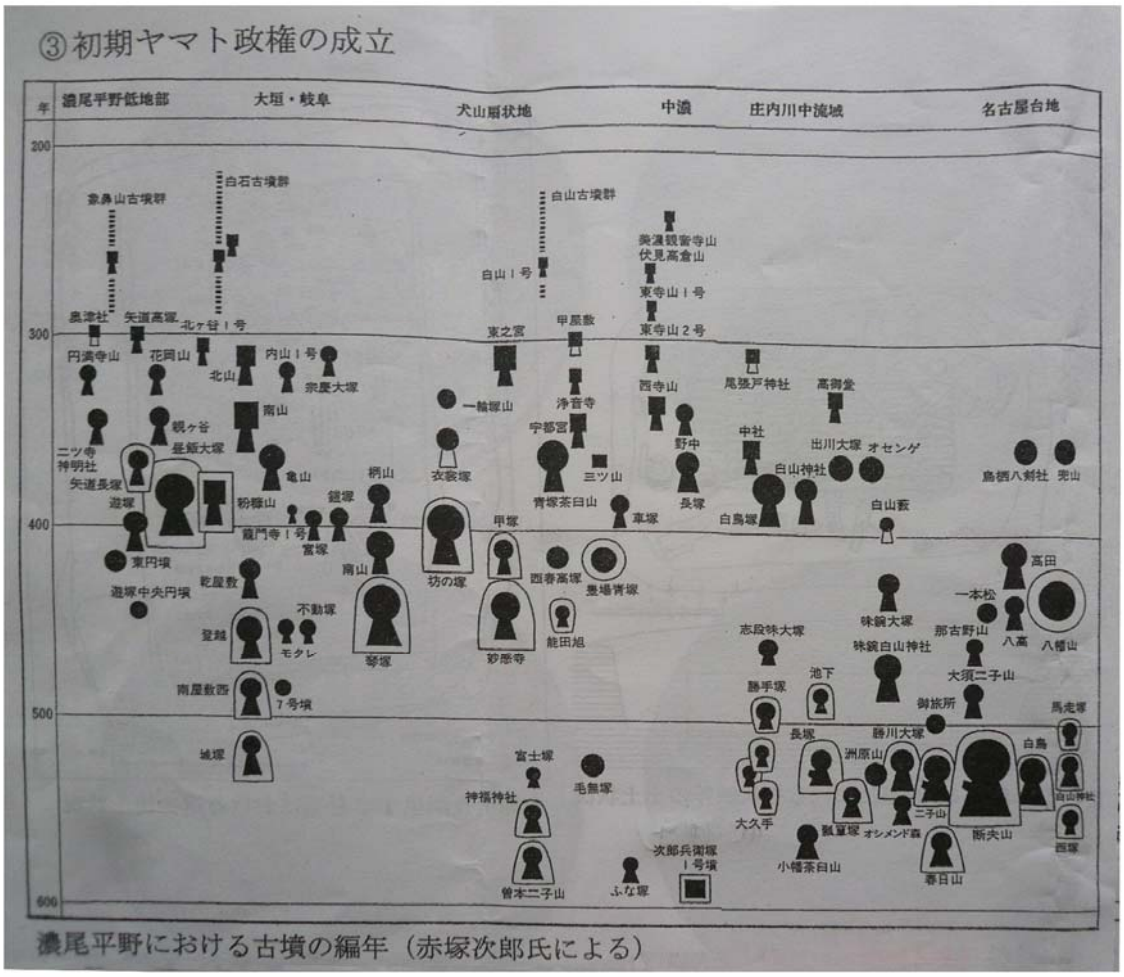
卑弥呼と対立していたという魏志倭人伝にも記載がある狗奴国がこの東海地方ではないかという。

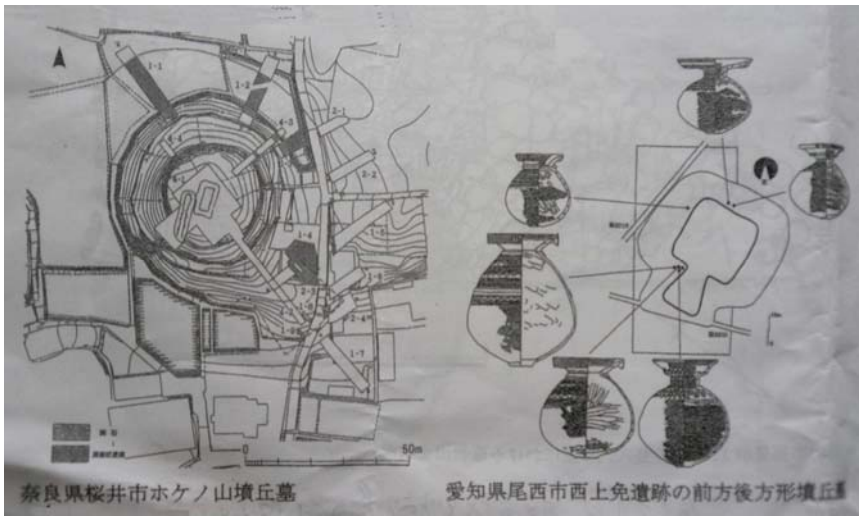
正始 8 年(248 年)、邪馬台国と狗奴国との紛争に際し、帯方郡から塞曹掾史張政が派遣されている。

この狗奴国の場所は明確になっていないが、濃尾平野･東海地方と考えられている。

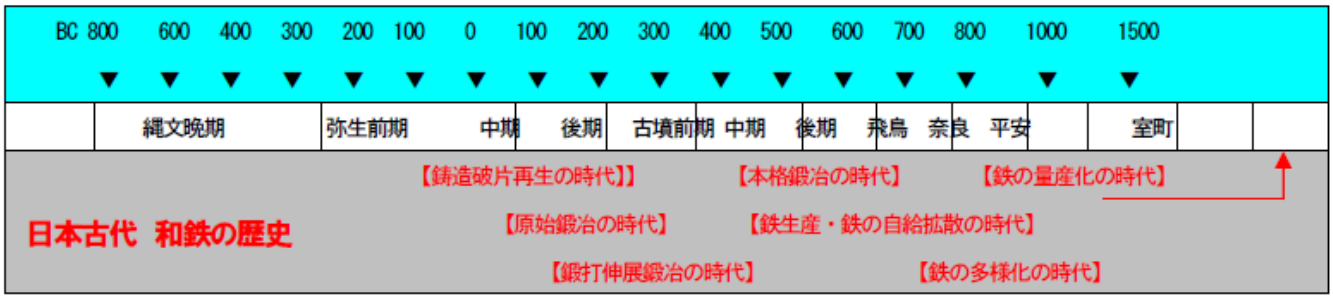
そして　纒向遺跡が隆盛する 4 世紀この東海地方は前方後方墳を捨て　一機に前方後円墳を築造する。

この時期か纒向遺跡隆盛と一致し、卑弥呼連合にさらに東海から東国　出雲・丹後・越などの日本海側諸国も加わって大和王権が成立。　新しい体制が必要になった大和王権がその根拠としたのが、纒向ではないかと





5. 鉄の歴史年表



1. 縄文晩期～弥生前期　紀元前 2 世紀～紀元 1 世紀　【 鋳造破片再生の時代 】

中国・朝鮮半島との交流は縄文時代晩期には既に始まっており、中国にその起源をもつ鉄器が日本に現れ、その後弥生前期には中国で製造された鋳物製の鉄斧などの破片を日本で割るなどの再加工して使用する事が始まる。

2. 弥生時代中期～後期　紀元 1 世紀～3 世紀初頭　【 原始鍛冶の時代 】

薄く板状に鋳込み表面脱炭去れた素材が日本に持ち込まれ、曲げなど簡単な鍛冶が行われるようになる。

3. 弥生時代後期以降～古墳時代中期　2 世紀～4 世紀　【 鍛打伸展鍛冶の時代 】

中国では脆い鋳鉄鋳物ばかりでなく、鉄鉱石を低温還元焼成してつくられた塊状錬鉄が得られるようになり、脱炭鋳鉄と同時に日本にこれらが持ち込まれるようになり、これらを素材とした鍛錬加工（原始鍛冶）がスタートし、次第に本格鍛冶へと移って行く。

4. 古墳時代初頭以降　初期～中期　3 世紀中半～5 世紀　【 本格鍛冶の時代 】

大陸では塊状鉄精錬が本格化し、鍛冶材料として広く流布。朝鮮半島でもこの塊状鉄精錬がスタートしたと見られるが、はっきりしない。

この当時　半島朝鮮半島の南部辰韓・加耶と倭国との交流が始り、4 世紀半ばには加耶が鍛冶加工された薄い鉄板（鉄鋌）の供給基地として登場し、渡来人の交流と共に大量の鉄鋌が鍛冶原料として持ち込まれるようになる。当初 3 世紀には北九州に限られた鉄の先進地が 5 世紀には瀬戸内・出雲・吉備・畿内へと東進してゆく。この間日本に於いてはこれら朝鮮半島から持ち込まれた鉄鋌と共にこの鍛冶・加工に使った鍛冶炉跡や鍛冶滓が大量に見つかるようになる。

5 世紀後半になると畿内には大県遺跡のような大規模な専業鍛冶集団が生まれて勢力を伸ばす。

5. 古墳時代中後期～飛鳥・奈良　5 世紀末～8 世紀　【 鉄生産・鉄の自給拡散の時代 】

その始りはまだはっきりしないが、5 世紀末から 6 世紀初頭にかけて　鉄鉱石原料とした箱型炉による製鉄精錬が日本国内（吉備）で始り、鉄素材の自給が始まった。また　国内に大量に存在する砂鉄を原料とした精錬も始り、日本での鉄自給の波が西国から東へ広がって行く。

7 世紀末から 8 世紀には現在の福島県原ノ町近傍（行方製鉄遺跡）まで広がりさらに、9 世紀には青森岩木山北山麓での製鉄が確認されている。

6. 奈良・平安時代　8 世紀～11 世紀　【 鉄の多様化の時代 】

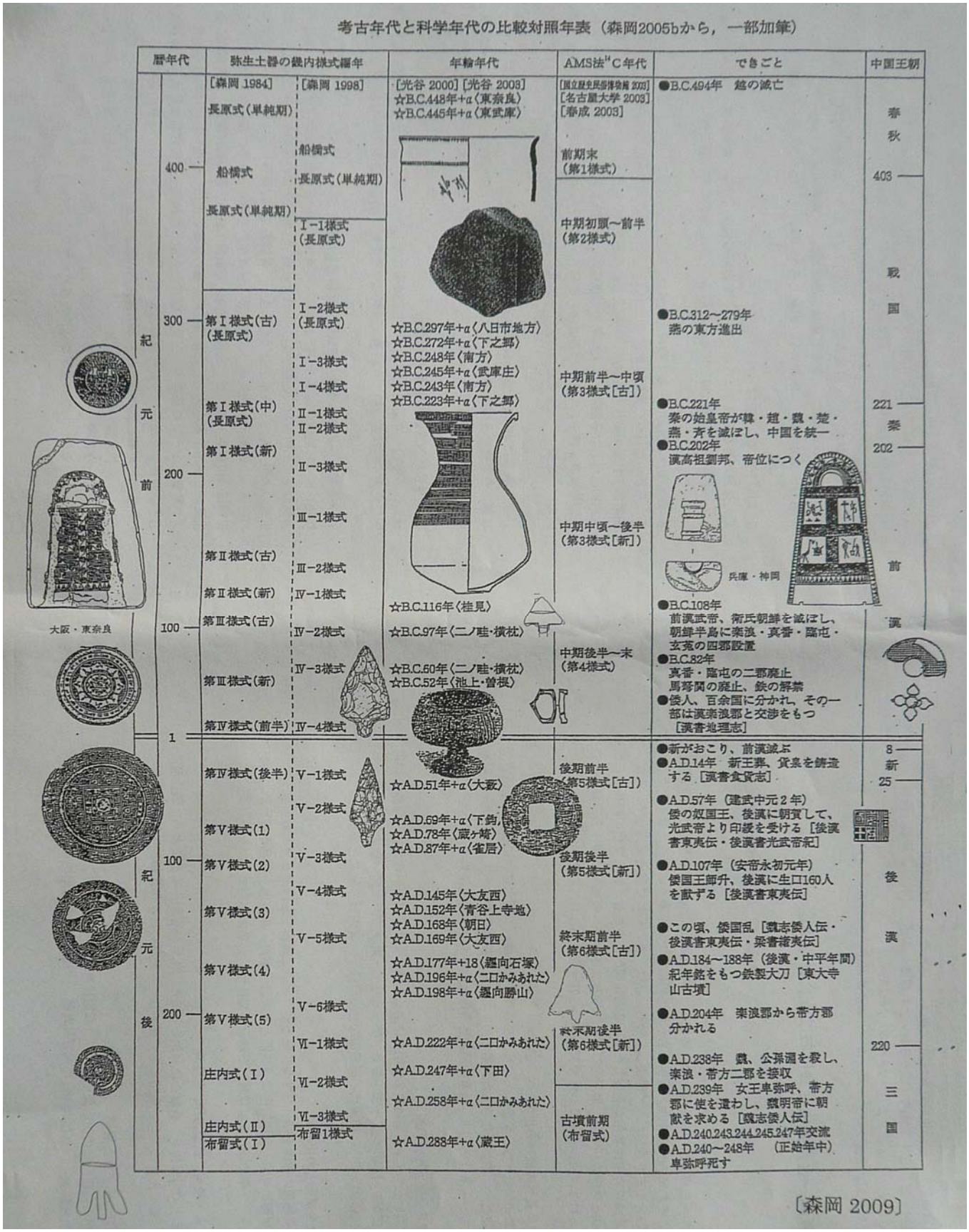
竪型炉が関東・東国に出現し、大型の箱型炉や鋳物遺跡の出現など鉄生産が日本全国におよび、鉄生産の多様化が進む。本格的な鋳物生産がはじまり鉄の多様化がはじまる。

7. 中世　15 世紀以降　【 鉄の量産化の時代 】

高殿たたらが鉄山経営として成り立ち　出雲など中国地方の生産が他を圧倒して行く

6. 歴史年表と編年の対応

古墳時代以前　日本には文字がなく、年代検討を行うには文字で年号が記載されている中国史書を手掛かりに土器器編年・鏡編年などを組み合わせて年代を検討する。史書は日本の弥生・古墳時代の時代比定ををする有力な司法である。それに　最近では　加速器 C14 年代測定法　年輪年代測定法など制度の良い年代測定法が用いられ、数 10 年単位程度にも年代が比定できるようになりつつある



年表

年代	中国		朝鮮	日本			関連する遺跡
前10000	新石器時代	前8000頃　農耕がはじまる 前3000頃　中国西北地方に銅器出現	櫛目文土器文化	縄文時代	早期 前期 中期 後期 晩期		
前2000	夏	前2000頃　二里頭遺跡で宮殿がつくられる					
前1500	殷	前1600頃　殷(商)王朝はじまる					
前1000	西周	前1027　周の武王、殷を滅ぼす	無文土器文化	弥生時代	早期	水稲農耕はじまる	曲り田遺跡
前700	春秋	前770　周、都を洛邑に移す			前期		
前500		前552　孔子生まれる				前445　東武庫遺跡棺材(年輪)	大開遺跡
前400	戦国					青銅器が伝わる	入室里遺跡
前300							
	秦	前221　秦、斉を滅ぼす			中期	前245　武庫庄遺跡柱根(年輪)	
前200	前漢	前202　漢王劉邦、皇帝に即位					古津路遺跡
前100		前108　漢、衛氏朝鮮を滅ぼし、楽浪郡など四郡をおく	原三国時代			高地性集落出現	七日市遺跡
1	新	8　王莽、漢を簒奪				この頃、鉄が普及する	表山遺跡
	後漢	25　光武帝劉秀即位			後期	57　倭奴国王、後漢に遣使し印綬を賜う。	志賀島金印出土地
100						107　倭面土国王帥升、後漢に遣使	玉津田中遺跡
200							西条52号墓
		220　後漢献帝、曹丕に禅譲			終末期		岩見北山1号墓 内場山墳丘墓
	三国	238　魏、公孫氏を滅ぼす				239　卑弥呼、魏に遣使	若水古墳
				古墳時代	前期		西求女塚古墳
	晋	265　魏元帝、司馬炎に禅譲				266　壱与、晋に遣使	城の山古墳
300		316　西晋滅亡	三国時代				
400	南北朝				中期	倭の五王、中国南朝に遣使	
500					後期		
600	隋	589　文帝、南朝陳を滅ぼす		飛鳥時代		600　遣隋使派遣	

五斗長垣内遺跡

出典：兵庫県立考古博物館 2008『光は西から ―弥生人、文明との出会い―』展示図録より引用、一部改変

時代	弥生時代				古墳時代			
年代	AD1		190		260	400	500	600
時期	前期	中期 前葉 中葉 後葉	後期	終末期	前期	中期	後期	終末期
土器	第Ⅰ様式	第Ⅱ様式 第Ⅲ様式 第Ⅳ様式	第Ⅴ様式	庄内式	布留0式 布留1式 布留2式 布留3式	高蔵73型式 高蔵216型式 高蔵208型式 高蔵23型式 高蔵47型式	陶器山15型式 高蔵10型式 陶器山85型式 高蔵43型式 高蔵209型式	飛鳥様式

弥生時代・古墳時代の時期区分と暦年代

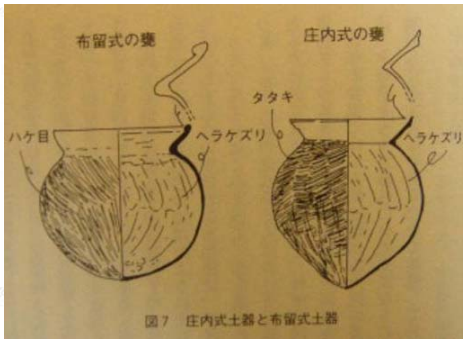
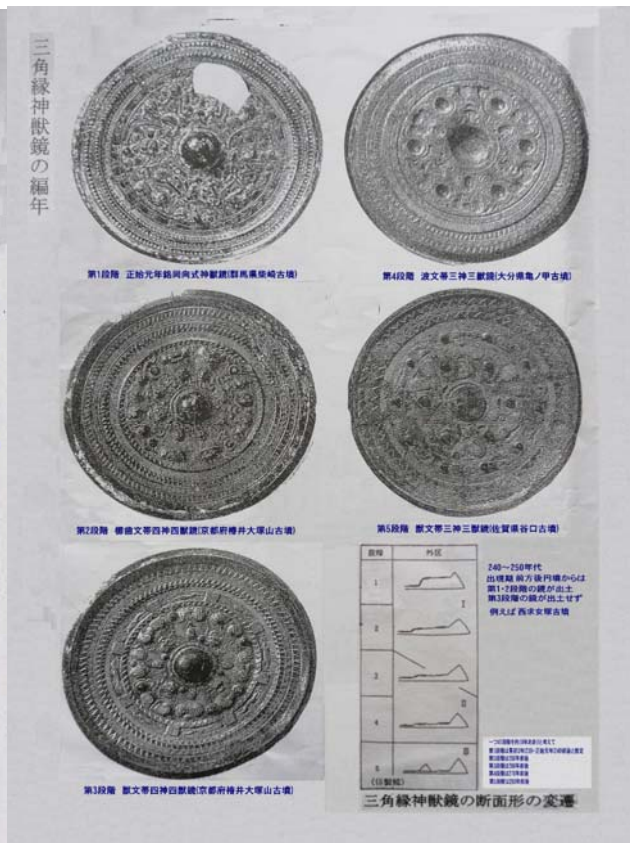


図7 庄内式土器と布留式土器



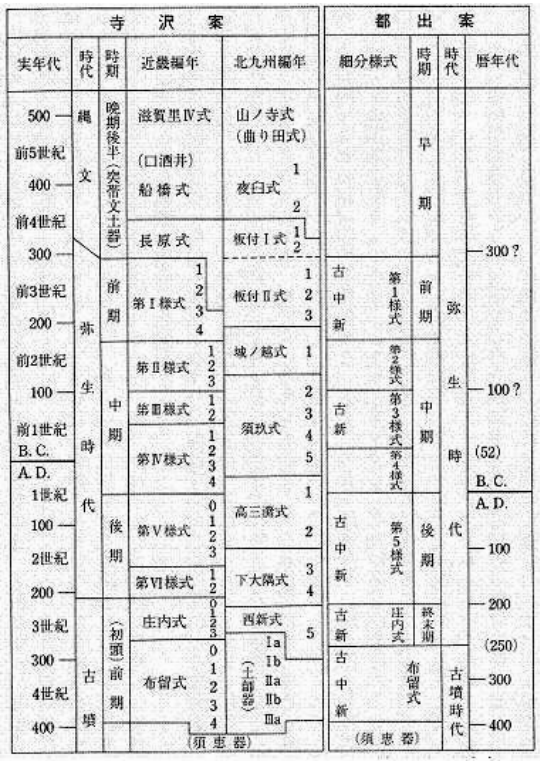
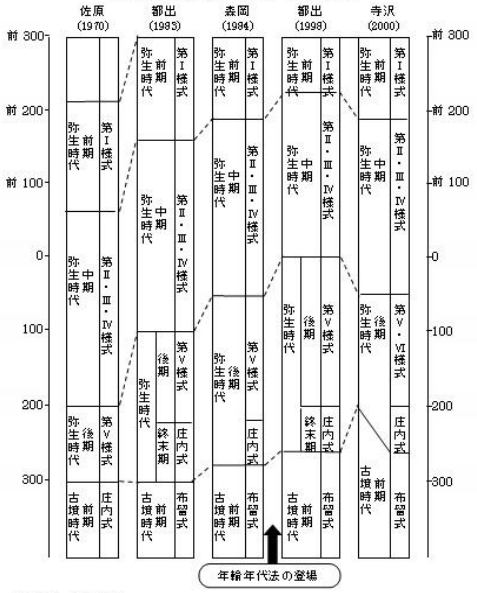


図 21 近畿地方　土器年代比較表



（注）以下を参考に作図した
佐原 嵩　「古代の日本　五　近畿」(1970)　都出比呂志「古代国家はこうして生れた」(1998)
都出比呂志「三世紀の九州と近畿」(1983)　寺沢 繁　「王権誕生」(2000)
森岡秀人　「大阪湾沿岸の弥生土器の編年と年代」(1984)　倉持秀矣　「卑弥呼の謎　年輪の証言」(1999)

14.

弥生後期から卑弥呼の時代へ　ベールを脱いだ「弥生のIron Road 和鉄の道」

淡路島　五斗長垣内遺跡の謎　シンポ　2010.11.21.　聴講 して

シンポジウム

五斗長垣内遺跡の謎にせまる

11月21日（日）　13:00～16:00

会場：北淡震災記念公園セミナールーム

当日受付、入場無料、定員150名

パネラー
村上恭通（愛媛大学教授）
大久保徹也（徳島文理大学教授）
禰宜田佳男（文化庁主任調査官）
伊藤宏幸（淡路市教育委員会主幹）
コーディネーター
種定淳介（兵庫県立考古博物館学芸課長）

講演会

10月31日（日）「鉄と青銅―近畿弥生社会における金属器生産―」　森岡秀人（芦屋市教育委員会）
11月　7日（日）「五斗長垣内遺跡の発見―弥生時代鉄器工房群の発掘から―」　足立敬介（淡路市教育委員会）
11月14日（日）「おのころ島神話とヤマトの大王墓」　石野博信（兵庫県立考古博物館館長）
各回　13:30～15:00
会場：北淡震災記念公園セミナールーム

当日受付、入場無料、定員150名

2009年　1月23日　新聞紙上で「卑弥呼の時代の国内最大級の鍛冶工房村が淡路島北部で出土　」と報じられ、「卑弥呼の鍛冶工房村か　はたまた、この鍛冶工房が古墳時代幕開け　　大和倭国連合による日本統一のさきがけか・・・」と古代の夢を膨らませ、センセーショナルに報じられて、約2年。

出土品調査を含めた発掘調査も一段落。来年3月の調査報告書完成を前にこの調査で明らかになったことなどを中心に「　謎に包まれた卑弥呼の時代前夜　この遺跡が何を解き明かすのか???」をテーマに　この秋　3回連続講演会と総合シンポジュウムが　五斗長垣内遺跡に近い淡路市の北淡震災記念公園セミナーハウスで開催された。

本当に知りたいことばかり、興味深々で講演会・シンポに参加。
まだまだ　謎に包まれたままですが、聴講した中で知ったことなどを 私の独断　無手勝流でまとめました。

（　シンポジュウム講演のまとめではなく、私の理解・解釈まとめであること
ならびに、一部　講演・シンポで出なかった資料についても　補足しています。
ご留意ください。）

「五斗長垣内遺跡・ごっさ　かいと遺跡」は平成 21 年１月、播磨灘を望む淡路島の北部丘陵地の尾根筋から大規模な鉄器工房群（12 棟）を含む 23 棟の竪穴建物跡が発見され、弥生時代後期（２世紀後半）としては国内最大規模となる鉄器生産集落と淡路市から発表され、一躍脚光を浴びた。
当初「垣内遺跡」として発表されましたが、遺跡のある地名を入れて正式名「五斗長垣内遺跡」と命名された。
現在　五斗長垣内遺跡周辺は、国指定史跡化を目指して、遺跡を活かした地域づくりに、淡路市、兵庫県、地域住民が連携して取り組んでおり、　遺跡そのものは　すでに埋め戻されているが、尾根筋の上方に遺跡全景を一望できる展望台が整備され、播磨灘や家島諸島など遠方の景色も見渡すことができるようになっている。
また、遺跡の傍らには　地域の人たちによってモニュメントとして　竪穴住居(鍛冶工房)が作られ、本年 12 月 18 日には弥生時代の鉄器づくりが体験できる工房「ごっさ鉄器工房」１棟が完成する。
今後、「ごっさ鉄器工房」を中心として体験学習事業を展開するとともに、地域の新しいシンボルとして活用するという。

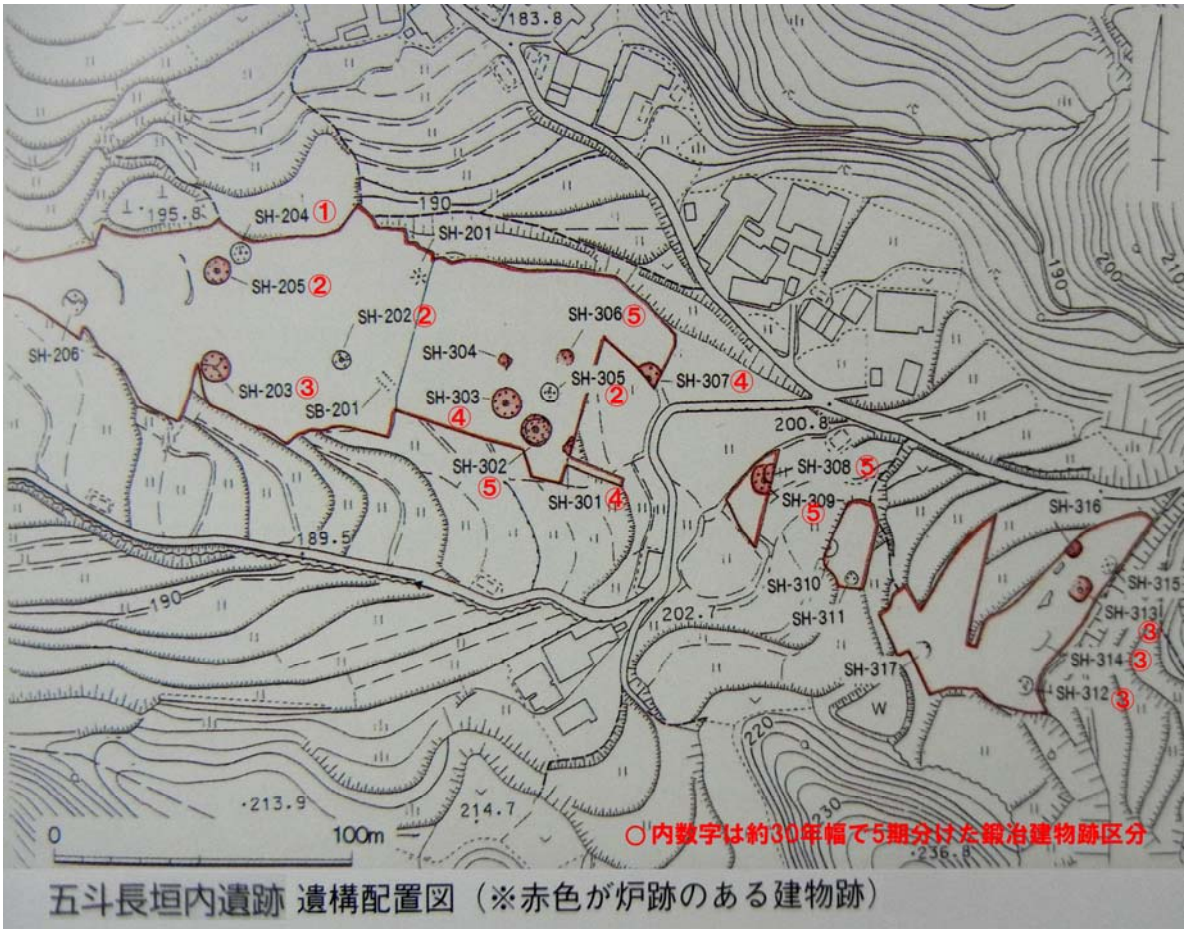
現在、国指定史跡化及び遺跡を活かした地域づくりに整備中の五斗長垣内遺跡　2010. 10. 31.

1.　五斗長垣内遺跡の概要

伊藤宏幸氏(淡路市教育委員会)講演「五斗長垣内遺跡と淡路島の弥生遺跡」より整理

1. 五斗長垣内遺跡の位置と遺構概要

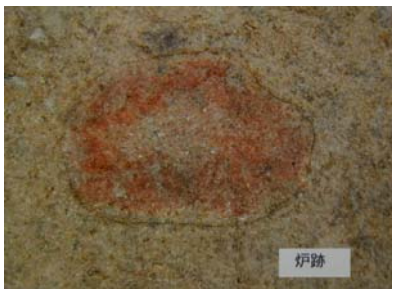
弥生時代後期初め　AD 20・30 年頃から AD200 年頃　後期末まで　淡路島北部　津名丘陵の西側　播磨灘を望む海岸から約 3km 入った　標高 200m 播磨灘を見下ろす南北の尾根筋の西面から東西に延びる枝尾根上　南北　約 50m 東西約 500m の範囲で約 170 年間継続的に維持された集落遺で、２３棟の竪穴住居のうち１３棟に鍛冶遺構がある国内最古・最大級の鍛冶工房村遺跡。この遺跡で一番古い SH-204 はどうも石器工房でこれがスタートで、その後　鍛冶工房へ移って行ったと考えられている。約１７０年間で５期にわたり　2～３棟の鍛冶工房が枝尾根上を移動しつつ維持されたとの報告であった。但し、通常の集落と異なり、生活臭の痕跡は見られず、鍛冶工房を営む高地性集落とみられる。

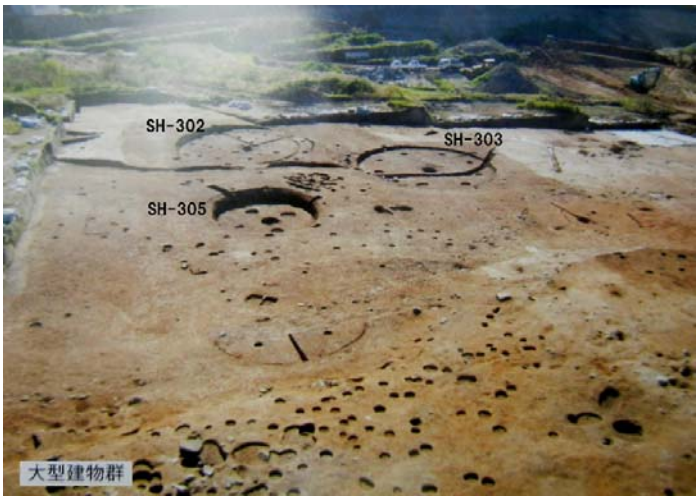


五斗長垣内遺跡の遺構配置図　　赤○内の数字は　遺跡出土建物跡を約 30 年刻みに 5 期に分けて時代を区分した数字

伊藤宏幸氏(淡路市教育委員会)講演より

- ◆ 形　状　　円形　１６棟　方形 or 長方形 2 棟　隅丸長方形５棟
- ◆ 規　模　　最大規模　SH-302 直径 10.5m 10 本柱
- ◆ 炉跡のある建物　12+1　13 棟
- ◆ その他　　掘立柱建物跡 1～２棟　　溝　土坑
- ● 炉跡構造　掘り込みのない床面をそのまま炉底とした構造(村上分類Ⅳ類)で羽口出土せず



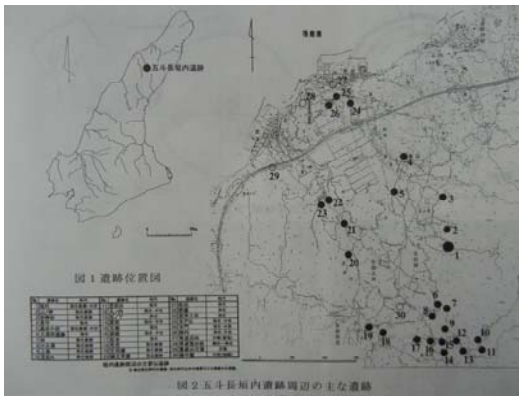


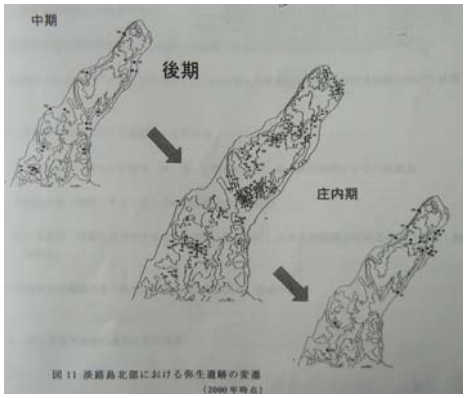
2. 五斗長垣内遺跡周辺の集落

五斗長垣内遺跡のある淡路島北部のこの津名丘陵周辺では　五斗長垣内遺跡と同様に　この 1～2 世紀　丘の上の高地性集落と麓の集落が数多く出現し、2 世紀末頃消え去る。

（　卑弥呼の時代である３世紀後半にはこの丘陵地周辺の大半の集落はすべて消えてなくなる。）

また、この淡路島北部丘陵地にある高地性集落群の中で　五斗長垣内遺跡が「鉄」　舟木遺跡が「塩」　穴郷遺跡が「イイダコ」の生産工房だったらしい。



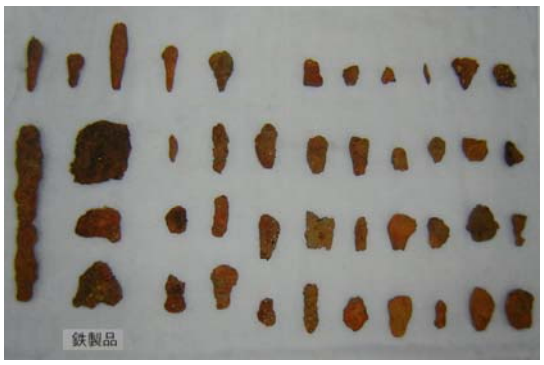


弥生時代後期　淡路島北部の弥生集落遺跡の興亡

五斗長垣内遺跡もこれら高地性集落や山麓の集落とともに弥生後期末には消え去り、卑弥呼の時代には引き継がれない

3. 五斗長垣内遺跡　出土品

1. 120 点を越える鉄製遺物が見つかり、そのうち 70 点以上が弥生時代の建物跡から出土
   鉄鏃などの小型の製品とともに板状・棒状の鉄片や裁断片などの鉄素材が多数出土し、鍛冶作業が行われていたことを示す。
   また、竪穴建物跡 SH-303 から出土した大型鉄製品は板状鉄斧であった
2. 石　　器　；叩石・台石・砥石など
3. 弥生土器　：壺・甕・鉢・高杯・器台などの一般的器種（小型土器・絵画土器を含む）
   コンテナ約２００箱に上る土器片が出土



- 小型鉄製品と数多くの裁断片が出土し、かつ　炉の構造や刃口が見つからぬことなどから、鏨切り加工が主の鍛冶工房とみられる。
  また、出土した大型鉄製品は、「板状鉄斧（てっぷ）」と呼ばれる鉄製の斧と確認された。
  鉄斧は長さ１７・９㎝、厚さ１・３㎝、刃部幅が４・９㎝、基部幅が３㎝、重さ約２６３g。
  基部が狭く刃部にかけて広がるバチ型をしている形状と、両側面から丁寧な鍛打が施されている製作技法などの特徴から、国内で製作されたものではなく朝鮮半島南部で製作された可能性が高いと新聞で知りました。
- コンテナ約２００箱に上る土器片が出土し、土器片の解析などをもとに個々の竪穴住居の年代が検討された。

土器に年代幅があることなどから、１世紀中頃～３世紀初めにまたがる遺跡であることが確認された。
また、一つの高坏の土に着目し、に注目し、「これは丹波系」との見方があり、鉄素材の輸入ルートとして朝鮮半島からの直接ルート、九州や瀬戸内経由のほかに、日本海ルートも今後、検討する必要があるという。

（　五斗長垣内遺跡の出土品調査状況の淡路市教育委員会から発表新聞記事より）

伊藤氏は講演のまとめとして　五斗長垣内遺跡の位置づけとして

「五斗長垣内遺跡の発掘を含め、淡路島では　遺跡の状況が弥生時代の中期と後期で大きく変化することが明らかになってきつつある。この後期の大きな変化の中で　この五斗長垣内遺跡を考えることで、今後　この五斗長垣内遺跡の時代的位置づけや役割が今後明らかになるだろう」と結んだ。

2.　五斗長垣内鍛冶遺跡の時代的位置づけ　まとめ

村上恭通氏（愛媛大学東アジア古代鉄文化センタ長）　講演「弥生人が目指した鉄器化社会」より整理

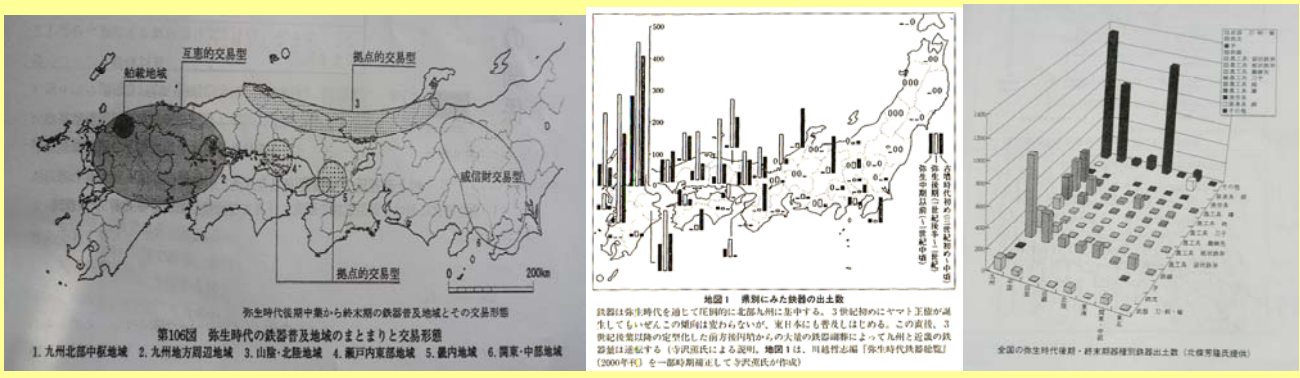
激変する弥生時代後期　「弥生の戦サ」の時代。　高地性集落が現れ、実用鉄器が西から東へ急速に普及していった時代であるが、村上氏が注目するのは　弥生人の鉄器に対する価値観が地域によって大きく異なっていると指摘する。

この時代　日本では鉄素材が自給できず、朝鮮半島の鉄に頼っていた時代である。　鉄素材の流通を北部九州握られ、鉄の入手がままならぬ各地では、鉄製武器や船載鉄器に対する信仰[威信財]に地域差が大きく生じていた。

朝鮮半島に近い北部九州では　鉄素材の量も質もそしてその加工技術を他の地域に比べはるかに優れ、日用鉄器・利器を充実化する社会に入っていたという。一方　北部九州から遠く離れた中部・関東では　鉄素材の供給はままならず、非日常的な鉄器を求める社会であり、関西以西では、鉄素材も十分でなく　技術も遠く北部九州に及ばず、集落出土土器が多い地域と埋葬跡出土土器の多い地域の相違が顕著であった。

弥生時代後期　北部九州と関西以東の鉄器の比較　写真中央は五斗長垣内遺跡出土鉄器と鉄片

【参考】弥生時代　地域別鉄器出土数の変遷　（シンポとは別資料から参考に補足添付）



弥生後期　西から東へ普及してきた実用鉄器の先端技術の先端は　ちょうど丹後・播磨・淡路・徳島の南北ライン近辺でそれより東側では　まだまだ　石器が中心の時代であるが、急速に鉄器化が進んでゆく時代で、かつ　集落が地域集落から地域連合・首長国へと集団化が進み、西日本・関西では戦いが頻発する弥生の戦さの時代、高地性集落が起こり、鉄器への需要がさらに高まる時代である。

そんな先進技術「鉄」伝播のフロントに位置する淡路は近畿の鉄器化への先端地。　五斗長垣内遺跡もこの時代の流れの中に位置づけられると考えられ、村上恭通氏は　この時代背景を元に五斗長垣内遺跡の位置づけを考えたいと述べられた。

村上恭通氏の意見要旨は次の通り。

① 炉床編年でⅣ期（床上で直接火入れを実施、炉として溶解に必要な高温を維持できない）８００度程度が限界だったと考えられる。また、出土する鉄製品は大型の鉄器はみあたらず、小物の鉄器製作であり、薄い鉄素材か棒状の小さい鉄素材を鏨切り加工で鉄製品を作った鍛冶工房と考えられ、断裁鉄片も多数みつかっており、北部九州のような本格的な高温鍛接技術は入っていない。

② 北九州で始まった鉄の鍛冶加工の弥生時代中期以降の歴史をたどると　鉄器の普及は東から西へ前進するその過程で時代が後になるほど、鍛冶炉が簡易型に退化する傾向がみられ、この五斗長垣内遺跡の鍛冶炉も退化簡易型の鍛冶炉で羽口も出土していない。

③ 鍛冶工房内で見つかった大型鉄製品は当初鉄素材か?と期待されたが、板状鉄斧と判明。
鍛冶炉の構造などからするとこの厚くて硬い板状鉄斧を鉄素材として使いこなせる技術はなかったと考えられる。

③ これらを合わせ考えてゆくと　現段階では　この鍛冶工房が大和や卑弥呼など大集団とつながる広域流通の鍛冶工

④ 房とは考えられず、周辺近隣集団へ小物鉄器中心の鉄器を提供する鍛冶工房であると考えられる。
（卑弥呼の時代にはこの鍛冶工房は消失。周辺の集落もほとんど消失して　卑弥呼の時代まで集落の継続もない）
この五斗長垣内遺跡の役割は　現段階では周辺近隣集落群の連携対象の鍛冶工房であったと淡路の狭い地域対象の鍛冶工房と考えたい。

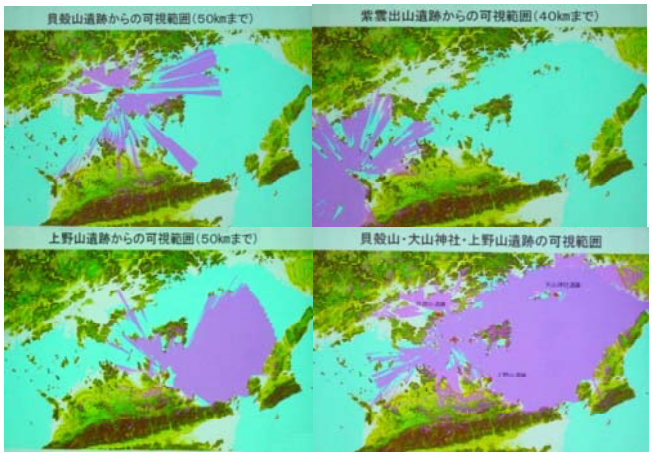
「五斗長垣内遺跡は卑弥呼・大和王権の時代につながる畿内の鉄流通の供給基地の先駆けではないか???」と古代のロマンを夢見てきましたが、どうもそうとは言えないというのが、現段階の結論のようだ。

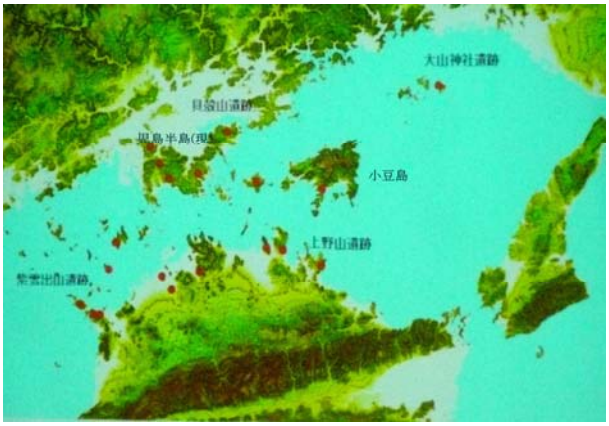
3. 弥生後期の和鉄の道・Iron Road

「播磨灘と五斗長垣内遺跡を考える 瀬戸内をめぐる交流・地域間関係」大久保徹也氏（徳島文理大）　講演より整理

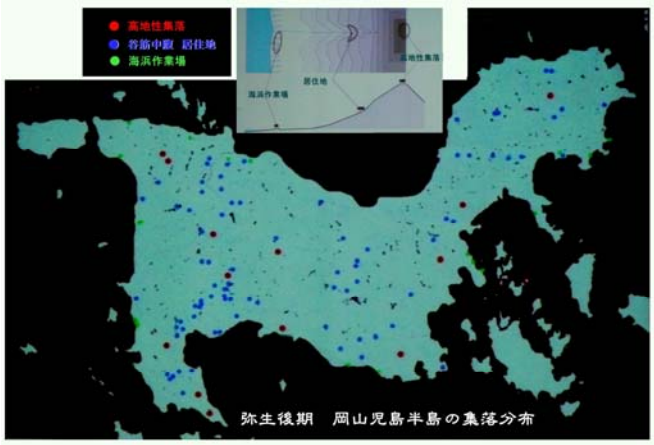
淡路島の西　瀬戸内海　児島湾・小豆島地域の弥生集落遺跡は弥生中期～中期末に集中し、後期には消失する。

この時期に淡路では集落が集中する。これら瀬戸内沿岸の集落の立地パターンは「海浜作業場+山麓谷筋奥の居住地＋高地性集落」となっていて、これらの集落が相互に連携していたことがよく判る。一つの高地性集落では全方位を見渡すことができないが、周辺の高地性集落が連携すると全方位が監視でき、この連携が行われていたのではないかと大久保徹也氏は推定する。

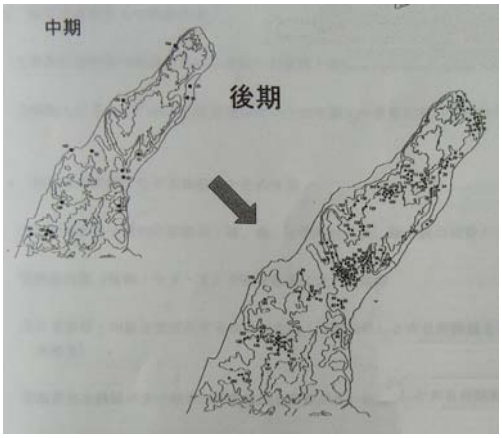




瀬戸内海　備讃瀬戸・播磨灘周辺の高地性集落の連携による全方位監視の推定



弥生後期　岡山児島半島の集落分布



弥生後期　淡路島北部の集落分布

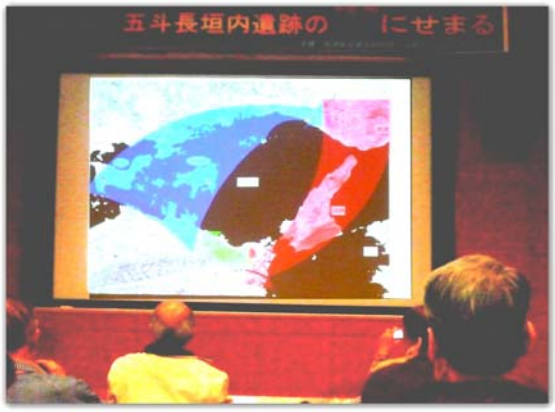
弥生時代　後期　　東部瀬戸内海・淡路島北部のの弥生集落分布

「海浜作業場+山麓の谷筋奥の居住地＋高地性集落」の集落構成パターンで、相互に連携していたと考えられている

五斗長垣内遺跡周辺の淡路島　北部綱丘陵地周辺の集落群も同じような集落連携が組まれていたであろうと推定する。

そして、これらの集落群は　戦さが落ちつく後期末には　ほとんどが継続することなく消失する。

また、これらの連携をモノの動き・交流から眺めると吉備・播磨・讃岐・阿波連携の面白い姿が浮かび上がってくる。



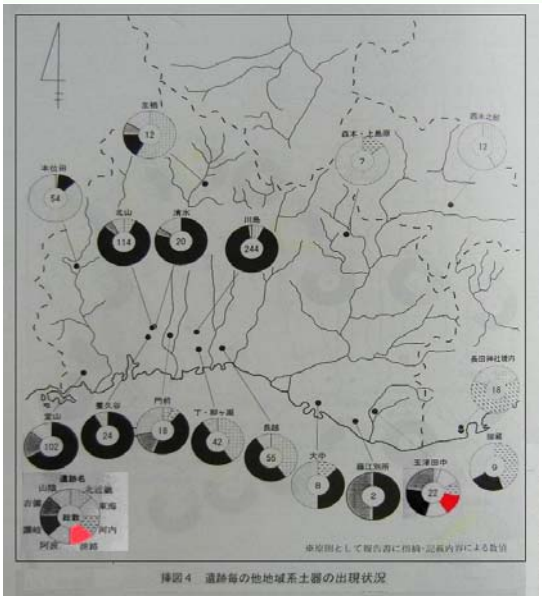
弥生後期　五斗長垣内遺跡周辺の交流・伝達路

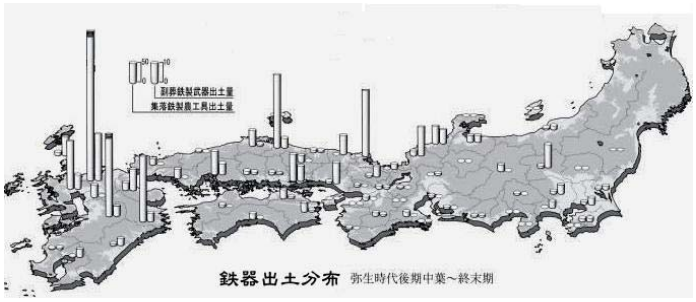
この地域のモノの動き・交流を初期土器製塩資料分布・銅鐸分布の変遷・大阪湾型銅戈&銅剣分布・鏡分布などより眺め整理すると

讃岐・吉備・播磨の交流はちょうど時計回りに交流路があったように見えるという。淡路島で見ると淡路の結びつきは明石海峡側からで、鳴門海峡側からの交流路は弱いという。

このことから大久保氏は五斗長垣内遺跡へつながる鉄の道は　吉備・播磨側からであろうと推定する。

（阿波もまた矢野遺跡など北部九州とつながる鉄の先進地の一つであるが、阿波から淡路へのルートはこの時代弱いとみられる。





弥生時代の和鉄の道　瀬戸内の IRON ROAD

大久保氏の指摘する時計回りの東瀬戸内交流路や東瀬戸内の土器分布から見た地域交流から見ると、東瀬戸内・大阪湾を時計回りに回るルードが　西から東へ東瀬戸内・畿内への交流路　「弥生時代の和鉄の道　瀬戸内の IRON ROAD」と推定される。当初　阿波から淡路や紀伊への流通路も想定されると思っていましたが、この道は弱いようだ。

村上恭通氏が指摘する弥生後期の実用鉄器伝播の最前線が播磨・淡路・阿波のラインと符合するのも興味深い。

鉄器生産の技術は、朝鮮半島から九州北部を経て、日本海、瀬戸内海沿いなど複数ルートで東へ伝わったとされるが、その実態はよくわかっていないのが実状でしたが、空白地帯と言ってもよかったこの五斗長垣内遺跡の出現で、そのルートがかなりクリヤーになってきた。

今後さらに解析・研究が進めば　この五斗長垣内遺跡「弥生の Iron Road」を解き明かしてくれると期待する。

4. 弥生時代後期　近畿でも急速に実用鉄器化が進んだことを示す石の刃物の変化

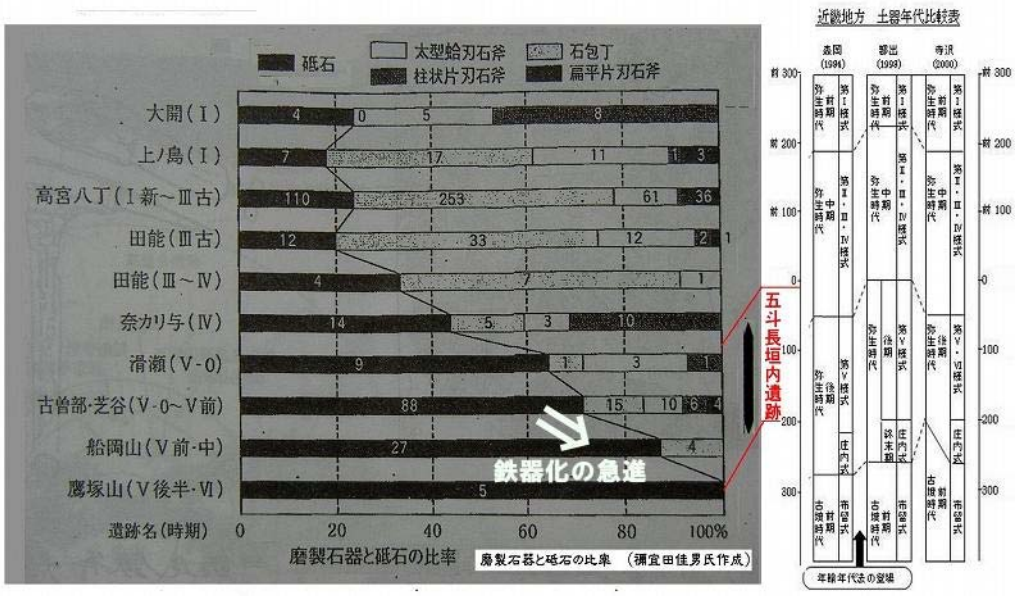
禰宜田佳男氏「近畿における石の刃物と鉄の刃物」よりまとめ

弥生の後期　近畿での鉄器での出土数は　九州や山陰・丹後・北陸の鉄の先進地と比べ　はるかに少ない。

しかし、この時代の石器の減少を通して鉄器が普及。

「見えざる鉄器」の存在に着目して、鉄器化の実態を考えねばならないという。　高地性集落が東瀬戸内・大阪湾沿岸に数多く出現する弥生の戦さの時代でもある。

五斗長垣内遺跡はそんな時代に近畿に現れた大規模な鍛冶工房遺跡である。



弥生時代後期(1世紀半ば～2世紀)には出土する石器のほとんどが砥石となり、石器製の農耕具の出土が激減する
近畿地方においても　この時代に実用鉄器の時代へ 入ったことがうかがえる。
(腐食等で鉄器の出土は少ないが、　鉄斧の柄が出土するなど実用鉄器の時代へ入ったことがうかがえる)

弥生の後期　近畿地方での鉄器需要急増の変化を示出土石器の急変

[禰宜田佳男氏作成資料を基に整理して本図作成]

また、　禰宜田佳男氏は　明石海峡を挟んで淡路島がすぐ目の前播磨と摂津の国境地帯をなす明石川領域は西から東への交流路の重要地点と指摘する。

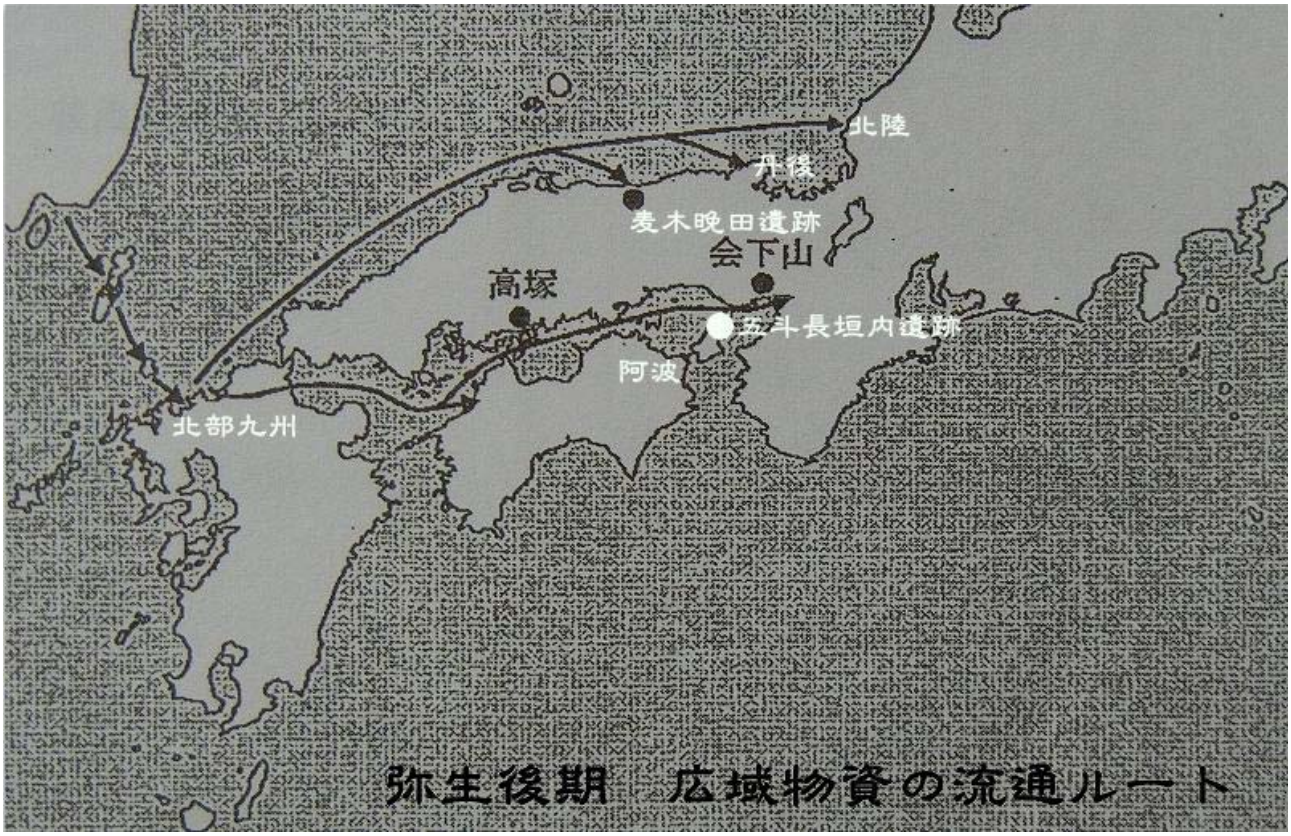
六甲山脈の険しい山並みが神戸の西で海に落ちる地点で丘陵地が連なるところで、この明石川沿いは早くから開け、幾つもの高地性集落を伴う弥生の集落群があった。六甲の山並みと明石海峡の急流に阻まれ、弥生・古代の流通路は海岸沿いを離れ、明石川を遡って山を越えてゆく。

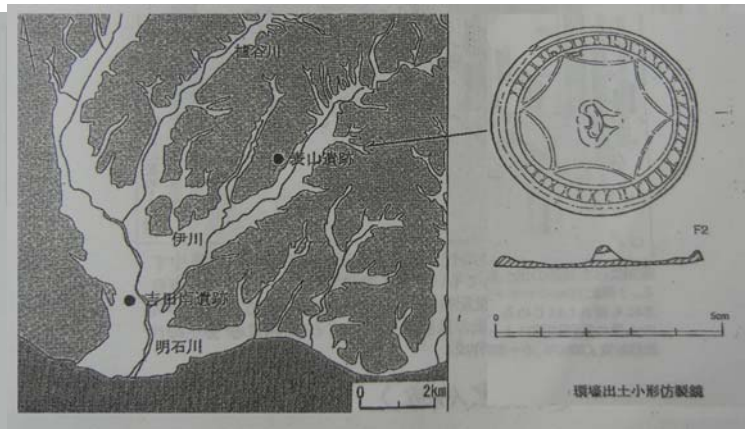
鉄器や青銅器が近畿で一番早く出土するなどの先進地であり、

明石平野(明石川流域)の弥生時代の遺跡分布

石器流通、鉄器・青銅器流通における拠点ではないかという。

（玉津田中遺跡で鋳造鉄斧の柄（中期）　表山高地性集落遺跡で近畿で一番古い小形仿製鏡の出土）





5.　まとめ

平成２１年１月　「卑弥呼の時代に入る前夜　弥生時代の後期　１世紀初頭から２世紀末までの約１７０年間　淡路島の北部の丘陵地に継続して営まれ、卑弥呼の時代の到来に呼応するかのように　周辺の集落群とともに消えて行った日本最大級の鍛冶工房遺跡　五斗長垣内遺跡」が出土したと発表され、この鍛冶工房の位置づけ・役割の解明が日本の古代史を解き明かす鍵になるとセンセーショナルに取り上げられた。

時代は石器から鉄器へ移り変わる時代　豊かな農耕文化が花開くとともに　集落の拡大連携による集団化が進み、次第に地域集団　さらに地域首長国へと展開し、この地域終端の拡大の中で　西日本では弥生の戦さが繰り広げられた時代である。

日本各地で鉄器に対するイメージは異なっていたとしても、西から東へ　大陸・朝鮮半島の新技術とともに鉄器の重要性が強く意識され、近畿・畿内を含む西日本ではその使用が急速に進んでいった時代である。

そんな時代背景の中　忽然と鉄の空白地　淡路島に出現した竪穴住居 23棟　うち１３棟が鍛冶工房という日本最大級の鍛冶工房遺跡　五斗長垣内遺跡。

発掘から２年　これまでの調査で分かったことを中心に　この五斗長垣内遺跡が謎に包まれたこの時代をどのように語るのか??興味津々の連続講演会とシンポジュームでした。

最大の関心事は　この五斗長垣内遺跡の役割と位置づけ　　五斗長垣内遺跡の謎の解明である

1. この鍛冶工房を統治していたのは　誰なのか　そして　それは　その後の時代　卑弥呼の邪馬台国
   そして　初期大和王権へとつながる大鍛冶工房なのか
2. まだ、鉄素材を朝鮮半島に頼らねばならぬ時代　鉄の先進地　北部九州からどんなルートがこの淡路島
   そして畿内へ伸びていたのだろうか

調査報告が継続中の今　まだまだ　解明には時間がかかると思っていましたが、いつも　断片的にしかもセンセーショナルにしか語られなかったこの時代が冷静に語られ、よく知らなかったこと　見えてこなかったことが　数多く頭の中に入ったことは大きな収穫。

● **この五斗長垣内遺跡の役割と位置づけ　　五斗長垣内遺跡の謎の解明**

五斗長垣内遺跡は卑弥呼・大和王権の時代につながる畿内の鉄流通の供給基地の先駆けかとも思っていましたが、村上恭通氏は鍛冶工房の質・周辺の高地性集落との同時性などから　垣内遺跡周辺の狭い地域への鉄器基地との考えを話された。
卑弥呼・初期大和王権へのつながり　その後現れる畿内の大鍛冶工房群との関係をイメージしていましたが、ちょっと残念な気もしますが、気になっていた羽口の出土しない退化型の簡易神代炉　そして鉄製品の規模を考えると納得。

芦屋の高地性集落・会下山遺跡にも鍛冶工房があったと聞くし、西日本の高地性集落には鍛冶工房を持つものが少なからずあると聞くし、先日聞いた　阿蘇の阿蘇谷の鉄集積の集落群　鉄の集積の大きな妻木晩田遺跡等々を考えるとこの五斗長垣内遺跡を卑弥呼・大和の時代へつなぐ大流通拠点と考えるのは現時点ではちょっと騒ぎすぎなのかもしれない。

鉄器生産の技術は、朝鮮半島から九州北部を経て、日本海、瀬戸内海沿いなど複数ルートで東へ伝わったとされ、広域の鉄の流通経路「弥生の Iron Road」があったのは事実。
この「五斗長垣内鍛冶工房遺跡」が　この「弥生の Iron Road」上で淡路島の枠を越えてもっと広い地域にまで役割を演じていたのかどうかは研究者の間でまだ　意見が分かれているようだ。

この時代　鉄の流通路を握る北部九州に対して、この鉄の流通路の確保を求めて、地域連携・集団化が進み、数多くの高地性集落を生む「戦さ」の時代。　約１７０年間も継続的に維持され　かつ　東瀬戸内をにらむ重要地点である。
西から東への鉄伝播の最前線の位置にあるこの鍛冶工房遺跡がもっと大きな役割を演じていたかもしれないとする学者も多い。この謎はまだまだ　これからである。

連続講演会で講演された森岡秀人・兵庫県芦屋市教委文化財担当主査は
「五斗長垣内遺跡は近畿に本格的な鉄器社会到来を証する重要な遺跡。
近畿と瀬戸内の中継点として、鍛造技術の導入や製品の流通に大きな役割を果たしたのではないか?
この謎を解く鍵は鉄と交換された見返り品が何であったかだろう」と。

五斗長垣内遺跡の役割の解明はまだまだ　これから。　今後の解明検討に期待したい。
来年３月にはこの五斗長垣内遺跡の発掘調査報告書完成すると聞きました。
また、この五斗長垣内遺跡の保存化が決まり、この五斗長地域連携の中で　遺跡の整備・国史跡指定化がすすめられているのもうれしい。

● **高地性集落の意味づけが今回のシンポで浮かび上がってきて、頭の中に納得で入ったのも収穫。**

高地性集落が周辺の集落と連携して、　鉄ばかりでなく色々な物の生産基地の性格があることも面白い。
戦さに備えて高地性集落が周辺の集落連携で周辺の敵を監視する機能を主にイメージしていましたが、平時には周辺集落連携の共同生産工房として機能し、戦になると周辺集落の逃げ込み場の役割を担っていたのかもしれない。

● **常々頭にあった明石川流域の弥生の高地性集落群の位置づけ**

禰宜田佳男氏は　明石海峡を挟んで淡路島がすぐ目の前　播磨と摂津の国境地帯をなす明石川領域は西から東への交流路の重要地点と指摘する。

明石海峡に落ちる六甲の山並の国境越が西から瀬戸内海沿岸を進んできた交流路の大きなバリアになると実感していましたが、それが取りあけられたような気になっています。

六甲山脈の険しい山並みが神戸の西で海に落ちる地点で丘陵地が連なるところで、この明石川沿いは早くから開け、幾つもの高地性集落を伴う弥生の集落群があり、弥生・古代の流通路は六甲の山並みと明石海峡の急流に阻まれ、海岸沿いを離れ、明石川を遡って山を越えてゆく。

畿内地域に入る厳しい六甲の山越えが　日本海側から播磨そして四国へ南北につながる鉄の最前線を作り、この最前線を境に西と東での大きな鉄器普及の差を生んだのかもしれない。

そのバリアを越える重要ポイントが　淡路島であり、明石川流域と考えるとうれしくなる。

播磨・摂津の国境周辺を　淡路島側（写真右）　須磨旗振山側（写真左）　から眺める

参考　和鉄の道

1. 弥生時代後半　国内最大級の鍛冶の村　国生み神話の淡路島「垣内遺跡(鍛冶工房跡)」現地説明会　Walk　2009.1.25.
   http://buffalonas.com/mutsu/www/dock/iron/9iron02.pdf
2. 一筋縄ではいかぬ古墳時代の幕開け　激動の時代淡路島がその鍵を握るのか　????
   淡路島で発掘された卑弥呼の時代の日本最大級の鍛冶工房村の位置付けに思いをめぐらす
   http://buffalonas.com/mutsu/www/dock/iron/9iron04.pdf
3. 弥生の高地性集落【3】　畿内と播磨の境　明石川・伊川流域
   http://buffalonas.com/mutsu/www/dock/iron/6iron12.pdf
4. 弥生の高地性集落【4】　弥生の高地性集落に「弥生の戦」・「日本人のルーツ」を探して
   http://buffalonas.com/mutsu/www/dock/iron/6iron14.pdf
5. 弥生時代から卑弥呼の邪馬台国・大和初期王権　日本統一国家形成へ　時代を動かした鉄
   2010 年秋　関西各地で開催された博物館特別展とそのシンポジュウム　&　連続講演会　聴講まとめ
   無手勝流で　鉄をキーワードに弥生から邪馬台国を経て大和王権への変遷を読む
   http://buffalonas.com/mutsu/www/dock/iron/10iron13.pdf

参考資料

1. 弥生の鍛冶工房「五斗長垣内遺跡への道」　兵庫県立考古は菊物館・淡路市・淡路市教育委員会
2. 弥生の鍛冶工房「五斗長垣内遺跡への道」シンポジュウム資料「五斗長垣内遺跡の謎にせまる」
   村上恭通氏（愛媛大学東アジ古代鉄文化研究センター長）　大久保徹也氏（徳島文理大教授）
   禰宜田佳雄氏（文化庁主任調査官）　伊藤宏之（淡路市教育委員会）
3. 弥生の鍛冶工房「五斗長垣内遺跡への道」連続講演会資料　・・
   足立敬介氏（淡路市教育委員会）　講演資料「五斗長垣内遺跡の発見　－ 弥生時代鉄器工房群の発掘から －」
   森岡秀人氏（芦屋市教育委員会）　講演資料「鉄と青銅　― 近畿弥生社会における金属器生産 ―」
   石野博信氏（兵庫県考古博物館長）講演資料「おのころ島神話とヤマトの大王墓」
4. 播磨学研究所編「播磨から読み解く邪馬台国」